

法政大学 国際日本学研究所

Hosei University Research Center
for International Japanese Studies

The Newsletter



No.21 Feb.2015



C O N T E N T S

シンポジウム報告	2
研究会報告	13
東アジア文化研究会報告	23
勉強会報告	37
国際日本学研究叢書	40

2014年7月26日(土)
国際日本学シンポジウム
「＜日本意識＞の過去・現在・未来」
(法政大学市ヶ谷キャンパス
ボアソナード・タワー 26階スカイホール)

2014.4~2014.10活動報告

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来

国際日本学シンポジウム

＜日本意識＞の過去・現在・未来

- 日 時：2014 年 7 月 26 日（土）9：50～18：40
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 26 階 スカイホール
- 主 催：法政大学国際日本学研究所

- 総合司会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）
- 第 1 パネル司会：小林 ふみ子（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）
報告者：大木 康（法政大学国際日本学研究所客員所員、東京大学東洋文化研究所教授）
報告者：川田 順造（法政大学国際日本学研究所客員所員、神奈川大学特別招聘教授）
報告者：菱田 雅晴（法政大学国際日本学研究所所員、法学部教授）
- 第 2 パネル司会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）
報告者：横山 泰子（法政大学国際日本学研究所所員、理工学部教授）
報告者：鶴見 太郎（早稲田大学文学学術院教授）
報告者：山田 泉（法政大学キャリアデザイン学部教授）
- 第 3 パネル司会：星野 勉（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）
報告者：小林 ふみ子（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）
報告者：濱田 陽（法政大学国際日本学研究所客員所員、帝京大学文学部准教授）
報告者：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所客員所員、ボン大学名誉教授）
- 全体討議司会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）

第 1 パネル「儒教・儒学と日本意識」

本パネルでは、古く中国から日本へと移入された儒教・儒学が日本文化のなかで歴史的に近現代にまでどのような役割を担ってきたのか、東アジア的視野で考察した。

大木康氏（法政大学国際日本学研究所客員所員、東京大学東洋文化研究所教授）は「漢学、国学と華夷意識」と題して、日本人として中国文学を研究する立場から漢学史をふり返る報告であった。山崎闇斎、山鹿素行、また本居宣長らを例に、物事を中心一周縁という序列で捉える華夷意識や発想、文献学的方法において儒学の影響を強く受けていることを論じた。現代はいわば他者研究として行われている中国文学や哲学などの研究も、実は 20 世紀初頭までは外国研究ではなく、自己の血肉となった「漢学」として行われていたことにも触れつつ、いかに日本文化のなかに、思考や発想といったところまで抜きがたく儒教・儒学の影響が及んでいることを提示した。

川田順造氏（法政大学国際日本学研究所客員所員、神奈川大学特別招聘教授）は日本近代を問い直すことの一環として山鹿素行を取りあげた。当初儒学者として出発した素行は武士のあり方を理論化して兵学をうち立てる。赤穂藩に仕え、大石良雄らいわゆる赤穂義士の思想形成に影響を与えた。のちに明治政府が彼らを顕彰して建てた赤穂の大石神社には素行の銅像があること、その建立をめぐる、やはり忠君愛国の象徴とされた楠木正成の湊川神社との結びつきがあることを指摘した。日本こそが「中朝」とであると主張する素

行の『中朝事実』は乃木希典によって称揚されたことでも知られ、近代日本における素行の象徴的役割が浮き彫りになった。

菱田雅晴氏（法政大学国際日本学研究所所員、法学部教授）は、「中国新儒家思想の社会的背景」と題して、現代中国研究という立場からこの問題にアプローチした。超大国となった現代中国で生じている諸問題に対してどのような立場を取るか、「百花斉放」ともいえる現代中国の社会思潮の状況を概観し、そのなかの一つとして、「西側民主主義」を不十分として儒学の復興、さらに共産党の儒化による儒士共同体の実現までも唱える「新儒家思想」が浮上しつつあることを論じた。そこにおいて儒教・儒学は中国にとってのナショナリズムの象徴ともなっているが、国内的にも、また、東アジア全体でも共有される価値とはなりがたいと論じた。こうした背景の下、歴史記憶の一部としての日本像が形作られており、「愛国反日」が記号化し、それを叫ぶ人々のなかにも、日本文化を消費し、影響を受けている層がいるという複雑な状況があることを指摘した。

これらを通じて、儒教・儒学の受容が、さまざまな次元で日本に歴史的に大きな影響を与え、それは中国を鏡とする日本人の自己形成において近代・現代にまで揺曳する問題であること、しかしそれが今日、国内的にも対外的にも見えにくくなっていることが明らかになったといえよう。

【記事執筆：

小林 ふみ子（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）】



大木 康氏
（法政大学国際日本学研究所客員所員、
東京大学東洋文化研究所教授）



川田 順造氏
（法政大学国際日本学研究所客員所員、
神奈川大学特別招聘教授）



菱田 雅晴氏
（法政大学国際日本学研究所所員、
法学部教授）

第2パネル「漢字と日本意識」

西田如見の『華夷通商考』、寺島良安の『和漢三才図会』などの文献に共通した認識の一つが、「漢字を使う国は文明的で、漢字を使わない国は怪物的」という「位置づけ」であった。江戸時代の、おもに知識階層による考えであるが、当然ながら、一般的に識字力が低いレベルにある階層が多く存在している発展段階を前提としなければならない。

だが、東アジアにおける西洋文明との出会いによって、漢字表記の価値は降下の一途を辿った。福沢諭吉は予見した。「儒学を含む漢学は、臨終前の〈中日和〉（残灯の明）に過ぎず、全地球を支配する西洋文明の風は、きっと社会の方向を一にして止むこと」（『漢学の中日和』『全集』第8巻、612頁）がない、とした。

西洋文明との出会い後、「漢字離れ」が徐々に進展してきたが、日本では少なからず、西洋文明との調和、克服の努力がなされてきた。1875（明治8）年生まれの柳田國男はその一人。昭和初年、「全国山村生活調査」を実施した。その成果として1930年代後半、『国語の将来』などによって日本語のあるべき方向を提言した。分かりやすさと使いやすさを第一としたが、これは同時に、日本語の一部になっている漢字の再評価につながり、結果的にその価値を見直す契機にもなると思われる。

この漢字見直しは日本語表記における再認識には違いないが、マイナスの面も見逃すわけにはいかない。日本語は仮名だけで表記は可能だが、漢字を取り込んで、仮名混じり、漢字混じりが、日本語の基本となっ

ている。日本語教育では仮名と併せて漢字も対象となるから、非漢字圏の人々にとって仮名以上に漢字の習得が「障壁」となる面が浮きあがる。ともかく、漢字は一字ずつその読み方（音）が分からなくとも、視るだけでその意味が分かるという以心伝心の「記号」と知らしめる。アルファベットの英語にはない、漢字文化圏に特有の共有できる表現価値と受け止められる。

日中韓賢人会は今年（2014年）秋、808の共通漢字を発表する準備をしている。日本語の一部として漢字力を磨いてきた日本の貢献が再確認されることになろう。それをフランスのレオン・ヴァンデルメルシュ氏が『アジア文化圏の時代』（大修館・1985年）のなかで次のように示唆した。

「漢字文化圏の筆頭を成す発展国として、日本独自の使命を自覚したならば、かつて唐王朝が古典文化の伝播に果たした輝かしい先例に優るとも劣らない光輝とともに、世界文化再生の先駆者としての役割を、遠からず果たすることができそうである。そのために日本に必要とされるのは、一種の受け入れ精神をもう少し拡大することだけであろう。……漢字文化諸国の間に存在している分断的諸要因は、今や衰微の段階に入っただけでなく、むしろ逆の方向へと、強力な統一要因が動いている。それは、経済的發展と文化的均質性の相乗作用（synergie）である。」

【記事執筆：

王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）】



横山 泰子氏
（法政大学国際日本学研究所所員、
理工学部教授）



鶴見 太郎氏
（早稲田大学文学学術院教授）



山田 泉氏
（法政大学キャリアデザイン学部教授）

第3パネル「米・稲作と日本意識」

「米・稲作と日本意識」をテーマとする第3パネルは、小林ふみ子氏（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）の「都市文化としての米食」、濱田陽氏（国際日本学研究所客員所員、帝京大学文学部准教授）の「複数的宗教文化と日本意識の開放」、ヨーゼフ・クライナー氏（法政大学国際日本学研究所客員所員、ボン大学名誉教授）の「日本文化は稲作文化、儒教的集団主義社会で、中国文明の亜流か？」という三つの発表からなる。このパネルでは、日本人の主食とされる米、水田稲作を切り口として、日本社会、日本文化、そして、宗教意識を含む日本意識のあり方を明らかにすることが試みられた。

小林ふみ子氏によって、江戸文学における表現から、日本人の主食とされる米食が、日本近世を生きた人々にとって、実際には主食であったというよりは、「米銭」という言葉にも認められるように江戸の都市生活と結

びついた富貴の象徴であったことが裏付けられた。これに対して、和歌や狂歌の分析を通じて、米、稲田を「稲作文化国家」というイメージと結びつけることには確かな根拠がないこと、それゆえ、それは近代において「創られた伝統」であることが示された。

もともと熱帯性の多年性植物であった稲が温帯の日本列島にもたらされ、水田稲作が始まったが、この水田稲作のうちに、日本人の宗教意識に連なる他の生物を含む自然との関わりの特性を探り当てるのが、濱田陽氏の発表の主旨であった。稲田は生きとし生けるものとの多様な関わりの場であり、この多様性から国家レベルに回収されない日本人の宗教意識の多様性が引き出される。この点に関して、川田順造氏から、灌漑さえ整えば連作が可能な水田稲作の特性、および、灌漑のための水路の共同管理というような点に日本社会を考えるうえでの有力な手掛かりがあるのではないかと、という発言があった。

ヨーゼフ・クライナー氏によって、外から見た日本文化という視点から、日本文化の説明原理の多様性を概観することを通じて、むしろ、そうした多様な説明原理自体がその背景にある歴史的事情などに相関的であることが示された。稲作を中心とする農耕社会がそのコアであるとする日本文化の共通認識は、柳田國男に由来するが、これも焼畑農業をどう位置付けるかという観点から、柳田國男自身によっても確実視されているわけではないこと、また、日本社会の集団主義、それと儒教との関係も、フロイスとケンペル、シーボ

ルトとでは見解が異なることが指摘された。そして、日本の大陸文化への依存性と日本文化の独自性をどう考えるかについても様々な有力な見解があるが、説明原理自体の背景、そして、中国、韓国、ヨーロッパとの（単なる依存という意味ではない）関係を勘案することが肝要であることが指摘された。

【記事執筆：

星野 勉（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）】



小林 ふみ子 氏
（法政大学国際日本学研究所所員、
文学部教授）



濱田 陽 氏
（法政大学国際日本学研究所客員所員、
帝京大学文学部准教授）



ヨーゼフ・クライナー 氏
（法政大学国際日本学研究所客員所員、
ボン大学名誉教授）

全体討議のまとめ

三つのパネルでの白熱した議論を受け、その補いと全体の総括を行うための全体討議が、当日プログラムの最後に、1時間の予定で行われた。途中退席の大木氏を除くすべてのパネリストが揃って登壇し総括の発言を行い、会場から出された質疑やコメントに回答を行った。司会は安孫子が行った。

総括発言の主な内容を発言順に記せば以下となる。まず、①川田氏は、稲作が集団主義的日本意識の形成に寄与したとして、そのような文化的な力は、米という作物が持つ輪作可能といった自然的性質にそもそも負っていることを忘れてはならないと指摘した。②菱田氏は、日本意識をただ文化の観点からソフトに語り続ける態度に対して、そこからは未来は出てこない、日本意識は政治的に選び取られ、敢えて提示されるものでなければならないと主張した。③横山氏は、日本意識が多く文化現象に探られるとしても、それは、かつては中国、その後は西洋に対する日本の辺境性という立ち位置に根ざすもので、先鋭化の強弱はあれ、そもそも政治的なものだ述べた。④鶴見氏は、日本意識が対外意識であって、内の多様性や可変性に目を閉ざしがちであり、たとえば標準語の視点でしかそれが語られないことに危惧を表明した。⑤山田氏は、日本意識の美点が外から多くのものを圧縮して細やかに受け入れることにありとて、他方でそこには主権者

としての人間が決定的に欠如していると指摘した。⑥小林氏は、日本意識の形成が政治的直截性を欠き、文化を通じての間接的なものであるとしても、それが外を意識して行われた紛れもない自己形成であることを評価すべきだと主張した。⑦濱田氏は、日本意識は誰が、さらには何が持つ意識なのかを改めて問い、それは内だけでなく外が、さらには人間だけでなく他の生物もが日本について持つ、 commons 的な意識の総体であるはずだと指摘した。最後に、⑧クライナー氏は、日本意識はイコール、大和意識なのではなく、それは沖縄にもまたアイヌにも根ざした複線的なものであると指摘した。なお、このような総括を受けて行われた聴衆との質疑応答の中で、聴衆の一人から、今日、日本意識の検討はフクシマを忘れて行われてはならない、との指摘がなされたことも付言しておきたい。

以上の一連の発言は、「日本意識とは何か」をめぐる当日一日の議論の全体を、そこになお残る問題点とともに、それぞれきわめて鋭利にあぶり出すものとなっていて、大変重要なものであった。こうして全体討議から確認されたことは、今年度末までという残された時間に、当課題研究が歩むべき道のりは必ずしもわずかではない、ということである。

【記事執筆：

安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）】

■報告者と発表論題

総司会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）

9:50～10:00	開会挨拶	田中 優子（法政大学総長、法政大学国際日本学研究所所員、社会学部教授）
第1パネル：テーマ「儒教・儒学と日本意識」		司会：小林 ふみ子（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）
10:00～10:30	漢学、国学と華夷思想	大木 康（法政大学国際日本学研究所客員所員、東京大学東洋文化研究所教授）
10:30～11:00	山鹿素行	川田 順造（法政大学国際日本学研究所客員所員、神奈川大学特別招聘教授）
11:00～11:30	中国新儒家思想の社会的背景	菱田 雅晴（法政大学国際日本学研究所所員、法学部教授）
11:30～12:00	質疑応答	
12:00～13:00	（休 憩）	
第2パネル：テーマ「漢字と日本意識」		司会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）
13:00～13:30	漢字を使う私、使わない夷狄	横山 泰子（法政大学国際日本学研究所所員、理工学部教授）
13:30～14:00	柳田民俗学と漢字	鶴見 太郎（早稲田大学文学学術院教授）
14:00～14:30	日本語教育と漢字	山田 泉（法政大学キャリアデザイン学部教授）
14:30～15:00	質疑応答	
15:00～15:30	（休 憩）	
第3パネル：テーマ「米・稲作と日本意識」		司会：星野 勉（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）
15:30～16:00	都市文化としての米食	小林 ふみ子（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）
16:00～16:30	複数の宗教文化と日本意識の開放	濱田 陽（法政大学国際日本学研究所客員所員、帝京大学文学部准教授）
16:30～17:00	日本文化は稲作文化、儒教的集団主義社会で、中国文明の垂流か？	ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所客員所員、ボン大学名誉教授）
17:00～17:30	質疑応答	
17:30～18:30	全体討議	司会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）
18:30～18:40	閉会挨拶	小口 雅史（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）



会場の様子1（報告者：川田 順造 氏）

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

International Japanese Studies Symposium “Japan-consciousness” and Its Past, Present and Future

Date: Saturday, 26 July 2014, 9:50-18:40
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 26F Sky Hall

Host: Hosei University Research Center for International Japanese Studies

Overall Chair: Shin Abiko (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

Panel I Chair: Fumiko Kobayashi (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

Speaker: Yasushi Oki (Visiting Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo)

Speaker: Junzo Kawada (Visiting Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Special Guest Professor, Kanagawa University)

Speaker: Masaharu Hishida (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Law)

Panel II Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Speaker: Yasuko Yokoyama (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Science and Engineering)

Speaker: Taro Tsurumi (Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University)

Speaker: Izumi Yamada (Professor, Hosei University Faculty of Lifelong Learning and Career Studies)

Panel III Chair: Tsutomu Hoshino (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

Speaker: Fumiko Kobayashi (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

Speaker: Yo Hamada (Visiting Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Associate Professor, Teikyo University Faculty of Liberal Arts)

Speaker: Josef Kreiner (Visiting Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor Emeritus, University of Bonn)

Concluding Debate Chair: Shin Abiko (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

Panel I: Confucianism and Japan-consciousness

We considered the role played by Confucianism, from an East Asian perspective, as regards Japan. Yasushi Oki (University of Tokyo) discussed the deep-rooted influence of Confucianism in “The Study of Chinese Classics, Japanese Classics, and Sino-centric-Consciousness”. Junzo Kawada (Kanagawa University), in “Yamaga Soko”, suggested that Yamaga Soko, who began as a Confucian scholar, was seen as a symbol of loyalty and patriotism in modern Japan. Masaharu Hishida (Hosei University) then discussed how Confucianism has become a symbol of Chi-

nese nationalism within the Chinese Superpower, in “Social Background of Chinese New Confucianist Thought”. These presentations showed us that, up until the modern age, Confucianism lingered in the distance in a Japanese self-realization which mirrored China, but that today it is beginning to fade.

Report by: Fumiko Kobayashi (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

Panel II: Chinese Characters and Japan-consciousness

The belief that “Countries that use Chinese characters (Kanji) are civilised, while those that do not are inhuman” had held during the Edo Period, yet Yanagita Kunio, in the early Showa years, remarked in *Kokugo no Shorai* (Future of Japanese) that the most important thing about Japanese was its ease of use and understanding, based on his “Survey of national rural living”. At the same time, this provided the momentum for reevaluating the Chinese characters that had entered into Japanese. In Japanese education, the learning of Chinese characters is an obstacle for those from the non-Chinese character sphere. On the other hand, meaning can be understood just by looking at Chinese characters, so that the value of this unique method of expression, shared within the Chinese character cultural sphere, is overwhelming. The Trilateral Cooperation Secretariat is expected to announce the 808 Chinese characters common to all, in autumn this year (2014). We look forward to a re-recognition of Japan’s contribution in refining the strength of Chinese characters as part of the Japanese language.

Report by: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Panel III: Rice, Rice Cultivation and Japan-consciousness

Panel III, on the theme of “Rice, Rice Cultivation and Japan-Consciousness”, consisted of three presentations. They were Fumiko Kobayashi (Professor, Hosei University Faculty of Letters): “Rice-eating as an Urban Culture”, Yo Hamada (Associate Professor, Teikyo University Faculty of Liberal Arts): “Multi-layered Religious Culture and Liberation of Japan-Consciousness”, and Josef Kreiner (Professor Emeritus, University of Bonn): “Is Japanese Culture, as a Rice-growing Culture and Confucian Collectivistic Society, a Mere Epigone of Chinese Civilization?”. This panel was an attempt to explain Japanese society and culture, as well as Japan-consciousness, including religious consciousness, using the Japanese staple of rice and rice-paddy cultivation as a new perspective.

Report by: Tsutomu Hoshino (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

Summary of the Concluding Debate

A concluding debate was held in order to supplement, and to bring to a general conclusion, the fervent discussions of the three panels. It took place during the hour allocated at the end of the day’s program. All the panelists, with the exception of Professor Oki who had to leave early, rose to give their concluding remarks, and responded to questions and comments from the floor. Several panelists renewed their expressions of doubt as to whether Japan-consciousness is to be found within historical traditions of Japanese culture.

Report by: Abiko Shin (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

文部科学省私立大学战略性研究基础形成事业（平成 22 年 -26 年）

基于国际日本学研究所方法的“对日认识”再讨论——“对日认识”的过去·现在·未来

国际日本学研讨会

“对日认识”的过去·现在·未来

日 期：2014年7月26日（星期六）9:50-18:40

会 场：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦26层 空中大厅

主 办：法政大学国际日本学研究所

综合主持：安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所员、文学部教授）

第一分会 主持：小林 芙美子（法政大学国际日本学研究所所员、文学部教授）

报告者：大木 康（法政大学国际日本学研究所客座所员、东京大学东洋文化研究所教授）

报告者：川田 顺造（法政大学国际日本学研究所客座所员、神奈川大学特聘教授）

报告者：菱田 雅晴（法政大学国际日本学研究所所员、法学部教授）

第二分会 主持：王 敏（法政大学国际日本学研究所专任所员、教授）

报告者：横山 泰子（法政大学国际日本学研究所所员、理工学部教授）

报告者：鹤见 太郎（早稻田大学文学学术院教授）

报告者：山田 泉（法政大学潜力开发人生设计学部教授）

第三分会 主持：星野 勉（法政大学国际日本学研究所所员、文学部教授）

报告者：小林 芙美子（法政大学国际日本学研究所所员、文学部教授）

报告者：滨田 阳（法政大学国际日本学研究所客座所员、帝京大学文学部副教授）

报告者：约瑟夫·克里纳（法政大学国际日本学研究所客座所员、波恩大学名誉教授）

全体讨论 主持：安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所员、文学部教授）

第一分会“儒教·儒学与对日意识”

研讨会在对日本进行思考的基础之上，从东亚的视角出发对儒教·儒学所扮演的角色进行了考察。在题为《汉学、国学与华夷意识》的报告中，大木康教授（法政大学国际日本学研究所客座所员、东京大学东洋文化研究所教授）对儒教·儒学根深蒂固的影响进行了论述。在题为《山鹿素行》的报告中，川田顺造教授（法政大学国际日本学研究所客座所员、神奈川大学特聘教授）揭示了以儒家为起点的山鹿素行成为了近代日本忠君爱国的象征这一事实。

在题为《中国新儒家思想的社会性背景》的报告中，菱田雅晴教授（法政大学国际日本学研究所所员、法学部教授）介绍了在已成为超级大国的中国，儒教正在成为国家主义的象征这一情况。通过这些报告我们可以得知，在以中国为参照的日本人的自我形成过程中，与儒教·儒学的距离是到近现代为止一直残留的问题，而这一问题到了今天正在变得越来越不明了。

【执笔者：小林 芙美子

（法政大学国际日本学研究所所员、文学部教授）】

第二分会“汉字与对日意识”

在江户时代，对于汉字的“定位”是，“使用汉字的国家是文明的，不使用汉字的国家是野蛮的”。柳田国男在昭和初年所进行的“全国山村生活调查”的基础之上，在《国语的将来》中指出了日语的易懂性和易用性是最重要的。同时，这也成为了重新审视日语中汉字价值的契机。在日语教育中对于非汉字圈的人来说，学习汉字是一个“壁垒”。然而另一方面，只看汉字就知道其中的意思也突出了汉字文化圈所特有的共同表现价值。中日韩贤人会议预定在今年（2014）秋季发表808个三国共通的汉字。日本将汉字作为日语的一部分，并且提升了汉字的能量，这一贡献一定会得到重新认识。

【执笔者：王 敏（法政大学国际日本学研究所专任所员、教授）】

第三分会“大米·种稻与日本意识”

在以“大米·种稻与日本意识”为主题的第三分会，小林芙美子（法政大学国际日本学研究所所员、文学部教授）的报告题为《作为都市文化的米饭》、滨田阳（法政大学国际日本学研究所客座所员、帝京大学文学部副教授）的报告题为《多重性宗教文化与日本意识的开放》、约瑟夫·克里纳（法政大学国际日本学研究所客座所员、波恩大学名誉教授）的报告题为《种稻文化、儒教性集团主义社会的日本文化是中国文明的亚流吗？》。该分会以被作为日本人主食的大米以及水稻种植为切入点，对日本社会、日本文化以及包含宗教意识的日本意识的状况进行了解析。

【执笔者：星野 勉（法政大学国际日本学研究所所员、文学部教授）】

全体讨论的总结

在三个分会热烈讨论的基础上，作为补充及全体性总结，会议在最后一个小时进行了全体讨论。除了中途退席的大木教授之外，所有发言者都登台进行了总结性发言，并对会场提出的疑问及评论进行了解答。通过这些发言，明晰了许多隐藏在日本文化的历史性传统中不容易被发现的问题。

【执笔者：安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所员、文学部教授）】



会場の様子2（報告者：鶴見 太郎 氏）

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)
국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

국제일본학 심포지엄

<일본의식>의 과거·현재·미래

일 시: 2014년 7월 26일(토) 9:50~18:40

장 소: 호세이(法政)대학교 이치가야(市ヶ谷) 캠퍼스
보아소나드 타워 26층 스카이홀

주 최: 호세이대학교 국제일본학연구소

전체 사회: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수)

제1패널 사회: 고바야시 후미코(小林 ふみ子, 호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수)

보고자: 오키 야스(大木 康, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원 연구소원, 도쿄대학교 동양문화연구소 교수)

보고자: 가와다 준조(川田 順造, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원 연구소원, 가나가와(神奈川)대학교 특별초빙교수)

보고자: 히시다 마사하루(菱田 雅晴, 호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 법학부 교수)

제2패널 사회: 왕 민(王 敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

보고자: 요코야마 야스코(横山 泰子, 호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 이공학부 교수)

보고자: 쓰루미 타로(鶴見 太郎, 와세다(早稲田)대학교 문학학술원 교수)

보고자: 야마다 이즈미(山田 泉, 호세이대학교 캐리어 디자인학부 교수)

제3패널 사회: 호시노 마나부(星野 勉, 호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수)

보고자: 고바야시 후미코(小林 ふみ子, 호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수)

보고자: 하마다 요우(濱田 陽, 테이쿄(帝京)대학교 문학부 준교수)

보고자: 요셉 크라이너(호세이대학교 국제일본학연구소 객원 연구소원, 본 대학 명예교수)

전체토론 사회: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수)

제1패널: 유교·유학과 일본의식

일본을 생각하는 데 있어 유교·유학이 담당해 온 역할에 대해 동아시아적인 시야에서 고찰했다. 유교·유학이 미친 영향을 빼놓을 수 없다고 논한 오키 야스(大木康, 도쿄대학교) 씨의 '한학, 국학과 화이(華夷)의식', 유학자로서 출발한 야마가 소코(山鹿素行)가 근대 유교·유학이 충군애국(忠君愛國)의 상징이 됐다고 제시한 가와다 준조(川田順造, 가나가와(神奈川)대학교) 씨의 '야마가 소코', 초강대국이 된 중국에서 유교가 중국 내셔널리즘의 상징이 된 것에 대해 논한 히시다 마사하루(菱田雅晴, 호세이대학교) 씨의 '중국 신유가(新儒家)사상의 사회적 배경'. 이러한 테마를 통해 유교·유학과 거리는 중국을 거울로 한 일본인의 자아 형성에 있어서 근현대까지

남아있다는 점과 다른 한편으로는 이것이 오늘날 찾아보기 힘들어졌다는 것을 알 수 있었다.

【기사집필: 고바야시 후미코

(호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수)】

제2패널: 한자와 일본어의 상생(相乗)작용

'한자를 사용하는 나라는 문명적이고 한자를 사용하지 않는 나라는 미개'하다는 관점은 에도시대에도 있었는데, 야나기다 구니오(柳田国男)는 쇼와 초년(1926년) '전국 산촌생활 조사'를 바탕으로 집필한 『국어의 장래』에서 일본어가 이해하기 쉽고 사용하기 편리하다는 점을 첫째로 꼽았다. 이는 동시에 일본어가 된 한자의 가치를 재조명하는 계기가 되었다. 그러나 일본어 교육에서 비한자권 사람들에게는 한자의 습득이 '장벽'이 되지만 다른 한편으로 한자는 보는 것만으로도 그 의미를 알 수 있으므로 한자 문화권 특유의 공유 가능한 표현 가치로도 대두되고 있다. 일·중·한 현인회(日中韓賢人会)는 2014년 가을 808개의 공동한자를 발표할 예정이다. 일본어의 일부로서 한자를 키워 온 일본의 공헌이 다시금 인식되었다고 생각한다.

【기사집필: 왕 민

(호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)】

제3패널: 쌀·벼농사와 일본의식

제3패널에서는 '쌀·벼농사와 일본의식'을 테마로 고바야시 후미코(호세이대학교 문학부 교수) 씨의 도시문화로서의 쌀밥, 하마다 테이쿄(테이쿄대학교 문학부 준교수) 씨의 '중층적 종교문화와 일본의식의 개방', 요셉 크라이너(본 대학 명예교수) 씨의 '일본문화는 벼농사 문화, 유교적 집단주의 사회에서 중국문명의 아류인가?'라는 3가지 주제로 발표가 이루어졌다. 이 패널에서는 일본인이 주식으로 하는 쌀과 수전농업을 통해 일본사회, 일본문화, 그리고 종교의식을 포함한 일본의식의 모습을 밝혀내고자 했다.

【기사집필: 호시노 마나부

(호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수)】

전체토론 정리

세 패널에서 이루어진 열띤 토론에 이어 이를 보충하고 전체를 총괄하기 위한 전체토론이 당일 프로그램 마지막 순서로 한 시간 동안 진행되었다. 도중에 자리를 뜬 오키 씨를 제외한 모든 패널리스트가 함께 등단해 총괄 발언을 했고 회의장에서 나온 질의와 코멘트에 대한 답변이 이루어졌다. 패널리스트의 발언으로는, 일본의식이 일본문화의 역사적 전통이라는 틀 안에 갇혀서 연구되고 있는 것이 아니냐는 의견이 다시금 표명되었다.

【기사집필: 아비코 신

(호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수)】



会場の様子3 (報告者: 濱田 陽 氏)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
研究アプローチ④＜日本意識＞の三角測量―未来へ

国際シンポジウム

受容と抵抗―西洋科学の生命観と日本

● 報告者：アラン・ロシェ（高等研究実習院教授〔フランス〕）

ポール・デュムシエル（立命館大学大学院先端総合学術研究科教授）

ドミニック・レステル（パリ高等師範学校准教授〔フランス〕／東京大学招聘研究員）

木島 泰三（法政大学文学部兼任講師）

金森 修（東京大学大学院教育学研究科教授）

村上 靖彦（大阪大学大学院人間科学研究科准教授）

米山 優（名古屋大学大学院情報科学研究科教授）

檜垣 立哉（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

チエリー・オケ（リヨン第 3 大学ジャン・ムーラン教授〔フランス〕）

● 日 時：2014 年 6 月 12 日（木）12:50～20:30

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階

イノベーション・マネジメント研究センター セミナー室

● 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）

● 企 画：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）／チエリー・オケ（リヨン第 3 大学ジャン・ムーラン）

国際シンポジウム「受容と抵抗―西洋科学の生命観と日本」では、「生命」の科学的な解明と技術的な管理とが格段に進行している現状を踏まえ、西洋科学に発するこのような「生命」へのアプローチに、＜日本＞がどのように反応してきたか、また反応しているのかが、思想史、科学史、精神医学、技術論など多くの観点から検討された。具体的には、日本、フランス、カナダの研究者計 9 名が、(1) 日本的心性と「生命」、(2) 現代日本社会における「生命」、(3) 日本の哲学的技術論と「生命」の 3 つの部門に分かれて報告を行った。本シンポジウムの企画は安孫子信（法政大学）とチエリー・オケ（リヨン第 3 大学ジャン・ムーラン）が行い、当日の司会は安孫子信が担当した。なお、発表はフランス語ないし英語で通訳なしで行われたが、日本語訳が配布され、質疑応答については日本語への通訳が行われた。

各報告者の発表の概要は以下の通りであった。

第 1 部 日本の心性と「生命」

(1) アラン・ロシェ（高等研究実習院〔フランス〕）
／江戸思想における生氣論の二つの源流

江戸時代日本における佐藤信淵を一つの頂点とする生氣論を対象に、それが、平田篤胤、二宮尊徳、会沢正志斎らが連なる「ムスビ」（産巢）の思想

の系譜と、儒学と道教という中国思想の系統とが合流して形成されたものであることを確認した。そして、江戸時代の生氣論が、マックス・ウェーバーが魔術対脱魔術化の対比に基づき示した四類型とは異なる背景から生じたものであることを明らかにした。

(2) ポール・デュムシエル（立命館大学）／ロボヴィー

ロボット学者の石黒浩が自分の姿に似せて作った人間型ロボット Geminoid（ジェミノイド）について「ジェミノイドに最期の時が来たら高野山に葬りたい」と述べたことを手掛かりに、墓所に人間だけでなく、車やロケット、ポンプ、あるいは殺虫剤で殺された虫の墓も作る日本人の心性、とくに、ロボットと人間とを結びつける日本人の死生観とはどのようなものであるのかが検討された。

(3) ドミニック・レステル（パリ高等師範学校〔フランス〕／東京大学）／わが友ロボット

たまごっちやロボット犬アイボ、あるいはファービーといった「友だちロボット」が日常生活の中に普及し、「ロボットを友だちとみなす」という奇妙な現象が一般化しているかのような日本の現状が、「友だち」や「友情」の伝統的概念の積極的な拡大の結果なのか、あるいはこれらの概念の無理解の結果なのか、が検討された。



アラン・ロシェ氏
（高等研究実習院教授〔フランス〕）



ポール・デュムシエル氏
（立命館大学大学院先端総合学術研究科教授）



ドミニック・レステル氏
（パリ高等師範学校准教授〔フランス〕
／東京大学招聘研究員）

第2部 現代日本社会における「生命」

(4) 木島泰三（法政大学）／'natural selection'の日本語訳と社会ダーウィニズムの残留

ダーウィンの進化論の根幹をなす natural selection の日本語訳としては伝統的に「自然淘汰」と「自然選択」の二つがあることに注目し、「淘汰」と「選択」の語義の変遷と、それぞれの語が選ばれた際の含意の相違を検討した。また、日本では「淘汰」の語が生物学だけにとどまらず、経済や教育といった社会の諸分野でも広く応用されていることが確認された。

(5) 金森修（東京大学）／現代日本の生政治学

1960年代に社会問題化し、「薬害の原点」とも評されたスモン薬害事件と、2011年3月11日に発生した東日本大震災による福島県における原子力発電所の事故を取り上げ、市民一人ひとりの福祉よりも企業の権益や専門家たちの内輪の人脈、

利益が優先される日本の社会の状況と、そのようなあり方を許す日本の生政治学（biopolitics）の実相が検討された。さらに、原子力問題に関しては、中立であることが期待されている国際的な機関も利権を優先して行動することが指摘された。

(6) 村上靖彦（大阪大学）／精神科病院における移行空間—或る日本の精神科病院を事例として

日本のある公立精神科病院で行った実地調査および看護師とのインタビューをもとに、患者と看護師との関係、患者と外の世界とのつながり、そして患者にとっての病院のあり方が検討された。その結果、精神科病院が患者を外界から隔離し、病院の内部に拘束することを目的とするのに対して、看護師たちが患者との日々の接触を通してその制約を外そうと取り組んでいることが示された。



木島 泰三氏
(法政大学文学部兼任講師)



金森 修氏
(東京大学大学院教育学研究科教授)



村上 靖彦氏
(大阪大学大学院人間科学研究科准教授)

第3部 日本の哲学的技術論と「生命」

(7) 米山優（名古屋大学）／西田における生命と技術

西田幾多郎の生命観、技術観を対象に、科学による物質や生命への態度と、科学的な「手続き」を進める主体がいかにして形成されたかが、「歴史的地盤」に遡って検討された。そして、意識するものと意識されるものは自覚によって包含されると考えた西田は、身体や行為から離れ、身体や行為を支配しようとするかのような科学に危いものを認めていたことが示された。

(8) 檜垣立哉（大阪大学）／三木清の技術論

三木清の技術論の検討を通して、それが、構想力についての独自の視点に基づき、西田幾多郎的な行為的直観を補完する「形」の論理としての意味を有するものであることが確認された。そして、ある「形」から別の「形」へと変化する

transformation 論が三木技術論の核心であることが示された。

(9) チェリー・オケ（リヨン第3大学ジャン・ムーラン [フランス]）／黒川紀章の共生の哲学

「機械の時代」から「生命の時代」への移行を目指す共生（symbiose）の哲学を提唱した建築家黒川紀章を取り上げ、二元論を批判するために「日本的」という点が強調された理由が検討された。さらに、黒川の代表的な取り組みであるメタボリズム運動について、普遍性を追求する「機械の時代」から「機能」ではなく「意味」を前面に据えようとした「生命の時代」の建築思想の意味が考察された。

以上のような9件の発表とその後に行われた発表者と参加者との間の真摯な討論を通して、西洋科学の「生



米山 優氏
(名古屋大学大学院情報科学研究科教授)



檜垣 立哉氏
(大阪大学大学院人間科学研究科教授)



チェリー・オケ氏
(リヨン第3大学ジャン・ムーラン教授 [フランス])

命」へのアプローチが導入される際にそれが日本の実態に即して理解されていたことや、「生命」をめぐる日本の科学的議論の中に西洋の議論では欠落している観点が含まれていること、さらには、日本に独特な「生命」の思考が日本だけにとどまらず世界に広まりを見せていること、などが明らかにされた。こうして、本シンポジウムでは、「国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来」という研究課題に沿って、とくに「生命」を巡る

＜日本意識＞について、その過去と現在が確認され、さらにその未来が展望されたのである。

なお、本シンポジウムで発表された内容は論文化され、2014年度中に論文集として刊行される予定である。

【記事執筆：

安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）、
鈴木 裕輔（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided)
Project for Private Universities (2010-2014)
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of
International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the
Past, Present and Future”
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-conscious-
ness’: into the Future”.

International Symposium

**Reception and Resistance: Life According
to Western Science and Japan**

Speakers: Alain Rocher (Professor, École Pratique des
Hautes Études [France])
Paul Dumouchel (Professor, Graduate School of
Core Ethics and Frontier Sciences, Ritsumeikan
University)
Dominique Lestel (Associate Professor, École
Normale Supérieure [France]; Guest Researcher,
University of Tokyo)
Taizo Kijima (Part-time Lecturer, Faculty of
Letters, Hosei University)
Osamu Kanamori (Professor, Graduate School
of Education, University of Tokyo)
Yasuhiko Murakami (Associate Professor, Grad-
uate School of Human Sciences, Osaka Univer-
sity)
Masaru Yoneyama (Professor, Graduate School
of Information Science, Nagoya University)
Tatsuya Higaki (Professor, Graduate School of
Human Sciences, Osaka University)
Thierry Hoquet (Professor, Jean Moulin Univer-
sity of Lyon III [France])

Date: Thursday, 12 June 2014, 12:50-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade
Tower 25F Seminar Room of the Research Insti-
tute for Innovation Management

Chair: Shin Abiko (Cross Appointee, Hosei Univer-
sity Research Center for International Japanese

Studies; Professor, Faculty of Letters)

Organisers: Shin Abiko (Hosei University); Thierry Hoquet
(Professor, Jean Moulin University of Lyon III)

The international symposium, “Reception and Resis-
tance: Life According to Western Science and Japan”, took
the approach of “life” as explained by Western science,
based on steps forward in scientific understanding of “life”
and technical improvement. It examined the issues of how
“Japan” responded, and how it responds to this approach,
from many viewpoints including the history of thought,
scientific history, psychoanalysis, and theory of technol-
ogy. Here, a total of nine researchers from Japan, France
and Canada gave presentations divided into three different
sections: 1) The Japanese mentality and “life”, 2) Modern
Japanese society and “life”, and 3) Japanese philosophical
theory of technology. The nine presentations were fol-
lowed by poignant debate between speakers and partici-
pants. It became clear that when Western science’s presen-
tation of “life” was introduced to Japan, it was understood
under its own terms. Also, there are viewpoints included
in Japanese scientific debate on “life” that are omitted
from the Western debate. Furthermore, Japan’s unique
thinking on “life” is not confined to Japan, but shows signs
of spreading worldwide. In this way, the symposium has
been true to the research theme of “Re-examining ‘Japan-
consciousness’ based on Methods of International Japa-
nese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present
and Future”; in particular it has handled “life” in “Japan-
consciousness” in the past and present, and has anticipated
directions for the future. The content of the presentations
heard at the symposium will now be written up, and hope-
fully published in a collection of papers for 2014.

Report by: Shin Abiko (Cross Appointee, Hosei University
Research Center for International Japanese Studies;
Professor, Faculty of Letters); Yusuke Suzumura
(Visiting Academic Researcher, Hosei University
Research Center for International Japanese Studies)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業(平成 22 年 -26 年)
 戦略研究基礎形成支援項目 研究方法④ “‘対日認識’
 の三角測量—面向未来”

国際研究会

接受与抵抗—西洋科学的生命观和日本

報告者: 阿兰·罗切(高等研究実習院教授[法国])
 保罗·迪穆谢尔(立命館大学研究生院尖端综合
 学术研究科教授)
 多米尼克·莱斯泰尔(巴黎高等师范学校副教
 授[法国]/东京大学聘用研究员)
 木島 泰三(法政大学文学部兼职讲师)
 金森 修(东京大学研究生院教育学研究科教
 授)
 村上 靖彦(大阪大学研究生院人类科学研究
 科副教授)
 米山 优(名古屋大学研究生院信息科学研究
 科教授)
 桧垣 立哉(大阪大学研究生院人类科学研究
 科教授)
 奇瑞·欧克(里昂第三大学教授[法国])
 日 期: 2014年6月12日(星期四) 12:50-20:30
 会 場: 法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层创新·
 管理研究中心 讲习室

主 持: 安孙子 信(法政大学国際日本学研究所所員、
 文学部教授)
 策 划: 安孙子 信(法政大学国際日本学研究所所員、
 文学部教授)/奇瑞·欧克(里昂第三大学教授)

此次国际研讨会题为“接受与抵抗—西洋科学的生命观和日本”。在“生命”的科学性解释以及技术性管理显著进步的背景之下,从思想史、科学史、精神医学、技术论等多种观点出发,探讨了日本对于从西洋科学起源的“生命”的研究是如何反应的。具体来说,日本、法国、加拿大的共计9名研究人员分别作了关于以下三个主题的报告。(1) 日本式的心性与“生命”、(2) 现代日本社会中的“生命”、(3) 日本的哲学性技术论与“生命”。发言结束之后,通过发言者和与会者之间的真挚讨论,以下几点问题得到了确认。作为西洋科学的“生命”的研究,在其导入之际因为符合日本的实际情况而获得理解;在日本围绕“生命”的科学性讨论中,包含着在西方的讨论中所缺少的观点;日本独特的“生命”的思考,不仅仅停留在日本而是在向全世界扩散。本次研讨会紧扣“基于国际日本学研究方法的‘対日認識’再讨论—‘対日認識’の過去・現在・未来”这一研究课题,明确了围绕“生命”的“対日認識”的过去和现在,并对未来的状况进行了展望。本次研讨会中所发表的内容预计会在2014年度以论文集的形式出版发行。

【执笔者: 安孙子 信(法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授)、铃村 裕辅(法政大学国際日本学研究所客座学术研究员)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년 ~2014년)
 국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토—<일본의식>의 과거·현재·미래
 연구④ <일본의식>의 삼각측량—미래를 향해

국제심포지엄

수용과 저항

—서양과학의 생명관과 일본

보고자: 아란 로셰(고등연구실습원(프랑스))
 폴 드무셰르(리츠메이칸(立命館)대학교대학원
 선단(先端)종합학술연구과 교수)
 도미니크 레스테르(파리 고등사범학교 준교수
 (프랑스)/도쿄대학교 초빙연구원)
 기지마 다이조(木島 泰三, 호세이대학교 문학
 부 겸임강사)
 가나모리 오사무(金森 修, 도쿄대학교대학원
 교육학연구과 교수)
 무라카미 야스히코(村上 靖彦, 오사카(大阪)대
 학교대학원 인간과학연구과 준교수)
 요네야마 마사루(米山 優, 나고야(名古屋)대학
 교 정보과학연구과 교수)
 히가키 다쓰야(桧垣 立哉, 오사카(大阪)대학
 교대학원 인간과학연구과 교수)
 치에리 오케(리용 제3대학 장 무란 교수(프랑
 스))

일 시: 2014년 6월 12일(목) 12:50~20:30
 장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25
 층 이노베이션 매니지먼트 연구센터 세미나실
 사 회: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학교 국제일본
 학연구소 소원, 문학부 교수)

기 획: 아비코 신(호세이대학교) / 치에리 오케(리용
 제3대학)

국제심포지엄 ‘수용과 저항—서양과학의 생명관과 일본’에서는, ‘생명’의 과학적인 해명과 기술적인 관리가 현격하게 진행되고 있는 현상을 염두에 두고 서양과학이 발신하는 이러한 ‘생명’에 대한 어프로치에 ‘일본’이 어떻게 반응해 왔고 또 현재는 어떻게 반응하고 있는지에 대해 사상사, 과학사, 정신의학, 기술론 등의 다양한 관점에서 검토했다.

구체적으로는 일본, 프랑스, 캐나다의 연구자 9명이 (1) 일본적 심성과 ‘생명’, (2) 현대 일본사회에서의 ‘생명’, (3) 일본의 철학적 기술론과 ‘생명’ 등 세 부문으로 나누어 보고했다. 9건의 발표가 끝난 후, 발표자와 참가자의 열띤 토론을 통해 서양과학에 ‘생명’에 대한 어프로치가 도입됐을 때 일본의 실태에 입각하여 이해하려 했다는 것과, ‘생명’을 둘러싼 일본의 과학적 논의에는 서양의 논의에서 결여되었던 관점이 포함되어 있다는 것, 또한 일본 특유의 ‘생명’에 대한 사고가 일본뿐만 아니라 세계에 널리 전파되었다는 점 등이 밝혀졌다.

이처럼 이번 심포지엄에서는 ‘국제일본학 연구방법에 기초한 일본의식의 재검토—<일본의식>의 과거·현재·미래’라는 연구 과제에 따라 특히 ‘생명’을 둘러싼 일본의식의 과거와 현재가 확인되었고 나아가 미래의 모습이 전망되었다. 본 심포지엄에서 발표된 내용은 논문화하여 2014년도 중에 논문집을 발간할 예정이다.

【기사집필: 아비코 신 (호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수), 스즈무라 유스케 (鈴村 裕輔, 호세이대학교 국제일본학연구소 학술연구원)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
 国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
 研究アプローチ①「＜日本意識＞の変遷―古代から近世へ」

第 1 回研究会

1764 年の朝鮮通信使の視座からみる日本意識

- 報告者：鄭 敬珍（法政大学大学院人文科学研究科国際日本学インスティテュート博士後期課程）
- 日 時：2014 年 6 月 26 日（木）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：小林 ふみ子（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）

約 200 年の間、朝鮮通信使は 12 回にわたり日本を訪れた。朝鮮通信使団の日本訪問には国書伝達や文化の交流といった政治的、外交的な目的もあったが、18 世紀に入り、時代が下るにつれ詩文や筆談の唱和に対する日本側の要求が高まり、朝鮮通信使の一行として日本人と詩文や筆談を専担する製述官や書記も派遣されるようになった。とりわけ江戸入りを果たした最後の使行、1764 年における朝鮮通信使の製述官および書記の目に映った日本、日本人に対する日本意識は注目しに値すると言える。

今回は、「兼葭雅集図」という一点の絵巻に注目し、1764 年の使行途中、この絵巻がどのように制作されていたのか、一連の過程を朝鮮側と日本側の記録を見比べながら考察し、そこから明らかになったことについての発表を試みた。その上で、朝鮮側の製述官や書記、大坂の兼葭堂会との交遊を通して、国や役割、身分や言葉を超えた相互認識や同流意識がいかにして芽生えていったのかという過程にも注目した。

最終的には、このような 1764 年の製述官、書記の日本意識が、海を越えて朝鮮の実学者たちによる日本に対する認識に、どのような変化をもたらしたのか、今までの分析では見過ごされてきた要素を補いつつ、新たな光を当てて一助とすべく、考察、発表を行った。

1. 海を渡り伝わった「兼葭雅集図」

「兼葭雅集図」は現在、韓国、国立中央博物館に所蔵され、大坂の文人、木村兼葭堂が自身の筆で兼葭堂会の詩会の場面を描いたものである。絵の横には、兼葭堂会のメンバー 7 人がそれぞれに書いた漢詩や、僧侶の大典が書いた跋文も収録されている。この絵巻の制作を依頼したのは、1764 年書記として朝鮮通信使に参加していた成大中（ソンデジュン）という人物である。大典の跋文からは、異国からきた文人との交遊のさまが窺える。そして、朝鮮に帰った成大中を通して、「兼葭雅集図」を目にした朝鮮の実学者たちは、自身の著書の中で「兼葭雅集図」や兼葭堂会についての記録を残している。

その人々は朝鮮燕行使として中国に派遣された実学者であり、もともと日本に対する印象はさほど良いものではなかったと思われる。だが、彼らの記録を見ると、1764 年の製述官や書記と兼葭堂会との交遊が、「兼葭雅集図」などを通して、日本を訪れたことのない朝鮮の実学者の日本意識の再認識にまでも影響を及ぼしていたことが分かる。

2. 1764 年の朝鮮通信使と庶孽文人

1764 年製述官として派遣された南玉（ナンオク）

と成大中、元重舉（ウォンジュンゴ）、金仁謙（キムインキョン）の三書記は、みな庶孽（ソオル、庶子）という身分であった。朝鮮社会において庶孽は庶孽禁錮法により、科挙に合格をしても良い職につけない、という身分的制約を強いられていた。更に、そのような身分的差別は代々と世襲化された。一方で、南玉や成大中のような、いわゆる「庶孽文人」たちは、詩社を結成することで身分的、思想的、文学的な交遊を深めていった。代表的な詩社としては、南玉が活動していた「椒林派」と、成大中、元重舉などが中心となった「北学派」がある。いずれの詩社も朝鮮通信使と朝鮮燕行使に深い関わりを持ち、外国の文物や文化を取り入れていった。

3. 使行録からみる交流と崔天宗殺人事件

南玉の記録によると、1764 年の通信使の製述官や書記は 500 人以上の日本人と約 1000 首を超える詩文を交わしていたという。とりわけ、江戸に向かう以前、および帰路で滞在した大坂においては、6 日間という短い期間中にもかかわらず約 140 人と唱和をしていたことが分かる。朝鮮側の使行録をみると、大坂におけるおびたしい唱和の場面が見出せる。また、南玉らに詩文を求めてきた日本人の中には必ずしも漢詩などに詳しい者ばかりではなく、「御利益」として異国人のものを手に入れようとした人々も存在していたことが明らかになっており、当時の日本人の「異国意識」を垣間見ることもできた。

同時に、南玉らは、兼葭堂をはじめとする兼葭堂会の一員たちに対する評価を使行録の中に残しているが、帰路の大坂では「兼葭雅集図」の跋文を記した大典も加わり、筆談を通した両国文人同士の交遊を深めていったことがわかる。

特筆すべきこととして、朝鮮に向かって出航する予定であった 1764 年 4 月 7 日、朝鮮通信使の一員、崔天宗（チェチョンジョン）が日本人により殺害される、前代未聞の事件が発生したことが挙げられる。朝鮮通信使一行は事件真相の究明のため、29 日間大坂に留まることになるが、犯人である對馬の訳官、鈴木伝蔵が処刑されるまで、南玉らの記録からは、兼葭堂会についての記録はほとんど見当たらない。しかし、同時期の大典の記録によると、南玉らと兼葭堂会との交遊が続いていたことが分かる。出入りが制限されていた南玉らの宿舎へ、僧侶である大典は出入りが可能であったのもあり、成大中は大典を通して、「兼葭雅集図」を依頼するようになる。

興味深いことに、朝鮮に帰国する前日によく「兼葭雅集図」を手にした南玉らの様子や、別れの場面な

研究会報告

どが詳しく書かれた大典の記録からは、互いが正に「朋友之会」の精神で交わっていたことが分かる。このような 1764 年の製述官や書記の視座からみる日本意識や両国文人同士の交遊は、日韓の歴史を考える上でも

非常に重要であると言えるだろう。

【記事執筆：鄭 敬珍（法政大学大学院人文科学研究科国際日本学インスティテュート博士後期課程）】



右より：鄭 敬珍 氏（報告者）、小林 ふみ子 氏（司会者）



会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

1st Research Meeting

Japan-consciousness from the Viewpoint of the Korean Emissary of 1764

Speaker: Gyeongjin Jeong (Doctoral Course, International Japanese Studies Institute, Hosei University Graduate School of Humanities)
Date: Thursday, 26 June 2014, 18:30-20:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
Chair: Fumiko Kobayashi (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

Korean emissaries visited Japan on 12 occasions over a period of 200 years. What was the “Japan-consciousness”

had towards Japan and the Japanese people seen in the eyes of document makers and scribes of the Korean Emissary of 1764, the last mission to gain entry to Edo?

I focused on a picture scroll called “Kenka gashuzu (Illustrations from an important meeting at Kenkado)”, and considered the sequence in the process of production of this scroll during the 1764 mission, comparing records made by scholars from both countries. Also, through the friendly exchange between the Korean document makers and scribes, and the Kenkado group of Osaka, we saw the process by which the seeds were sown for mutual understanding and awareness of common origins that transcended country, role and position.

Finally, I considered how that Japan-consciousness, had by the 1764 document makers and scribes who crossed the sea, influenced Korean scholars of practical sciences, and caused a reevaluation of their own understanding of Japan. In my presentation I shed new light on elements overlooked in previous analyses.

Report by: Gyeongjin Jeong (Doctoral Course, International Japanese Studies Institute, Hosei University Graduate School of Humanities)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業（平成 22 年 -26 年）

戦略研究基礎形成支援項目 研究方法① “‘対日認識’の变迁——从古代到近代”

第 1 次研究会

以 1764 年朝鲜通信使为视角的对日意识

报告者：郑 敬珍（法政大学研究生院人文科学研究科 国际日本学学院博士后期课程）

日 期：2014年6月26日（星期四）18:30-20:30

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主 持：小林 芙美子（法政大学国际日本学研究所 所 员、文学部教授）

在大约200年的时间里，朝鲜通信使共访问日本12次。

那么在1764年最后一次出使江户的朝鲜通信使的眼中，日本、以及对日认识是怎样的状况呢。

此次研讨会主要将目光集中于《蒹葭雅集图》这一画卷，并对1764年出使途中该画卷的创作过程以及两国文人的记录进行了对比考察。在此基础上，还关注了朝鲜方面的文书记录人员通过与大坂蒹葭堂会的交流，取得超越国界与身份的共同认识的过程。

像1764年的朝鲜通信使这样跨越大海的对日意识，对于朝鲜的实学家自身重新认识日本起到了什么样的作用呢。此次研究会填补了以往的研究中被忽略的要素，并给予了该研究新的启示。

【执笔者：郑 敬珍

（法政大学研究生院人文科学研究科国际日本学研究员博士后期课程）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업 (2010년 ~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토- <일본의식>의 과거·현재·미래

연구① <일본의식>의 변천-고대에서 근세로

제1회 연구회

1764년 조선통신사의 시좌에서 본 일본의식

보고자: 정경진(鄭敬珍, 호세이대학교대학원 인문과학 연구과 국제일본학인스티튜트 박사후기 과정)

일 시: 2014년 6월 26일(목) 18:30~20:30

장 소: 호세이대학교 이치가야캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 고바야시 후미코(小林ふみ子, 호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수)

조선통신사는 약 200년간 12차례에 걸쳐 일본을 방문했다. 에도(江戸) 입성을 이룬 마지막 사절 행차, 1764년 조선통신사의 제술관(製述官) 및 서기(書記)의 눈을

통해 본 일본, 일본인에 대한 일본의식은 어떠한 것이었을까.

이번 발표에서는 ‘검가아집도’(蒹葭雅集圖)라는 한 점의 에마키(絵巻)에 초점을 맞춰 1764년 사절 행차 기간 중, 이 에마키가 제작되어 가는 일련의 과정을 양국 문인의 기록을 비교하면서 고찰하였다. 그리고 조선 측의 제술관과 서기, 오사카(大坂)의 ‘검가당회’(蒹葭堂會)와의 교류를 통해 나라와 역할, 신분을 초월한 상호인식과 동류의식이 어떠한 과정을 거쳐 발생했는가에 대해서도 주목했다.

마지막으로는 이러한 1764년의 제술관과 서기의 일본의식이 바다를 건너, 조선의 실학자들이 일본에 대한 인식을 재인식 하는 데에 어떠한 효과를 가져왔는지, 지금까지의 분석에서 간과해 온 부분을 보충하면서, 새롭게 재조명하는 데 일조하기 위해 고찰, 발표했다.

【기사집필: 정경진(호세이대학교대학원 인문과학연구과 국제일본학인스티튜트 박사후기 과정)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
研究アプローチ①「＜日本意識＞の変遷―古代から近世へ」

第 2 回研究会

只野真葛のキリシタン考

- 報告者：ベティーナ・グラムリヒ・オカ（上智大学国際教養学部准教授）
- 日 時：2014 年 9 月 26 日（金）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：小林 ふみ子（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）

今年度、これまでの＜日本意識＞の変遷についての研究に不足していた視点を補うべく、ジェンダーによる＜日本意識＞の差異の有無を考えるため、女性に焦点を当てた研究会を連続して企画している。そこで、9 月 26 日（金）に行った第 2 回の研究会では、昨年、英文のご著書を翻訳して『只野真葛論―男のように考える女』（岩田書院、上野未央訳）を刊行されたベティーナ・グラムリヒ・オカ氏を迎えて、真葛がどのような＜日本意識＞をもっていたのかについてお話しいただいた。

ご著書では真葛の主著『独考』を中心として、真葛が、国学者の思想に近くはあるものの、ロシア事情に通じて『赤蝦夷風説考』を著した父工藤平助の影響下に、独自の思想を形成したことを論じられたオカ氏は、今回は「キリシタン考」という小文を取りあげて、『独考』以後の思想的展開を論じられた。

真葛は、この小論において日本を「正直国」と呼び、その人心が歪んで道徳的に頹廃した原因を「邪法」、つまりキリスト教の伝来に帰する。容易に感化されがちな庶民に対してキリスト教の影響力は重大な脅威となるものとして警告する。そのキリスト教理解は教義や信仰の内実には及ぶようなものではなかったが、他方、『独考』をふり返れば、キリスト教的権威を背景とする指導者による統治が成功しているロシアに、カリスマ的指導者が宗教を背景として人民を統制する理想化された国家モデルを見ていた、という。

以上のような真葛の思想は、本多利明、会沢正志斎、高橋景保、藤田幽谷ら、同時代の学者たちの著述と軌を一にすることがあるという。真葛は、幼時には歌を習った荷田蒼生子、歌学者であった祖母桑原やよ子らの影響が考えられるが、仙台藩士に嫁した後はまさに『独考』の題の通りに、独自に思想を形成し、これ

らの学者達のネットワークとの直接のつながりは確認できない。それでも、ロシアの南下、交易関係のあるオランダ以外の異国船が次々とやってくるようになった時代の状況のなかで、真葛と彼ら男性の学者達の思想には、ある種の愚民観やキリスト教に外圧の象徴を見てその排除を説く点で大きな共通性が見出せるという。

ただし、漢学を正式に学んだことのない真葛の著述はその意味で独創的だが素朴なところがあり、論としては男性の学者たちに学問的には及ばない。しかし、漢学の影響自体を日本の精神を惑わす害悪と捉える、国学者のような発想をもつ真葛にとっては、そのことはむしろ漢学に毒されない自身の自由さの利点として捉えられていた、とオカ氏はいう。

オカ氏のご報告の要点をごく簡単にまとめると以上のようなになる。祖母や父という家族関係による影響は考えられるにせよ、知識人の直接的な交遊のネットワークから隔絶されていた女性が、「国」のありよう、あるべき姿に対してここまで思索をめぐらすことができたということは興味深い。また、真葛を含む当時の学者たちが、誣かされやすい一般の人民には宗教的権威をもつ指導者の統治がふさわしいことを見抜いていたということは、近代日本の歩みを知る現代の目からすると驚くべき慧眼といえよう。最後に記した、正式に漢学を修める機会を与えられなかった女性ならではの経歴に、純粋な日本的思考の可能性をみるという逆転の発想は、今後、女性性と＜日本意識＞の関係を探る上で重要な視点を与えてくれるものであった。

【記事執筆：小林 ふみ子

（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）】



報告者：ベティーナ・グラムリヒ・オカ氏
（上智大学国際教養学部准教授）



会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

2nd Research Meeting

Tadano Makuzu and Her Thoughts on Christianity

Speaker: Bettina Gramlich-Oka (Associate Professor, Faculty of Liberal Arts, Sophia University)
Date: Friday, 26 September 2014, 18:30-20:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonnade Tower 25F Conference Room B
Chair: Fumiko Kobayashi (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

The second research meeting of the year heard “Tadano Makuzu and Her Thoughts on Christianity”, from Dr. Bettina Gramlich-Oka, as the first of a series of research meetings considering differences in “Japan-con-

siousness” through gender. Tadano Makuzu lived during the late Edo Period, and is known as a woman of unique thought. On one hand she saw the influence of Christianity upon the easily impressionable populace as a great threat, but she also envisaged the ideal state model in the system of a religious leader controlling the people. Although some of her thought agrees with the work and line of contemporary scholars such as Aizawa Seishisai, there are no signs of a direct link. And yet, in this era of successively arriving foreign ships, her identifying of the mass view and Christianity as symbols of that external pressure, and theorizing on its elimination, shows great commonality with their thought.

Makuzu herself, upon a background of the typical woman given no formal opportunity to study the Chinese classics, was able to use reverse thinking to see the possibilities in pure Japanese thought. These insights have provided us with an important viewpoint for future investigation of the relationship between femininity and “Japan-consciousness”.

Report by: Fumiko Kobayashi (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業(平成22年-26年)

戦略性研究基礎形成支援項目 研究方法① “‘対日認識’の变迁——从古代到近代”

第2次研究会

只野真葛の吉利支丹考

報告者: 貝蒂那・格拉姆里奇・奧卡(上智大学国際教養学部副教授)

日 期: 2014年9月26日(星期五) 18:30-20:30

会 場: 法政大学市谷校区 布瓦索納德大廈25層 B会議室

主 持: 小林 芙美子(法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授)

本年度第2次研究会考察了由于性別而产生的“対日意識”的差异, 作为系列研究会的第一期, 由貝蒂那・格

拉姆里奇・奧卡教授作了题为《只野真葛の吉利支丹考》的报告(“吉利支丹”是天主教的旧称)。只野真葛作为生活在近代后期并留下了独特思想的女性, 认为面对容易被感化的庶民, 基督教的影响力具有重大的威胁。另一方面, 她也认为宗教性领导人统治人民的制度是理想化的国家模式。这种思想虽然与会泽正志斋等同时代学者的著作有相同的地方, 但没有发现之间的直接关联。不过即便如此, 在异国的船只接踵而至的时代, 他们的思想所反映的一个很大的共同之处就是, 愚民的观念以及将基督教视为外压的象征主张排斥。

从逆向思维出发我们可以认为, 真葛正因为没有被给予正式学习汉学机会的女性, 所以从她的经历中可以发现纯粹的日式思考。这也为今后探讨女性与“対日意識”的关系提供了重要的视点。

【执笔者: 小林 芙美子

(法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구① <일본의식>의 변천-고대에서 근대로

제2회연구회

다다노 마쿠즈의 기리스탄 고찰

보고자: 베티나 그람리히 오카(조치(上智)대학교 국제교양학부 준교수)

일 시: 2014년 9월 26일(금) 18:30~20:30

장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사 회: 고바야시 후미코(小林 芙美子, 호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수)

이번 연도 제2회 연구회에서는 젠더에 의한 ‘일본의식’의 차이를 생각해 보는 연속 연구회의 제1탄으로, 베티나 그람리히 오카 씨가 ‘다다노 마쿠즈의 기리스탄 고찰’을 발표했다.

근세 후기를 살아가며 독자적인 사상을 남긴 여성으로 알려진 다다노 마쿠즈는 감화되기 쉬운 서민에 대한 기독교의 영향력을 증대한 위협으로 보는 한편, 종교적 지도자가 인민을 통제하는 제도에서 이상화된 국가모형을 봤다고 한다. 아이자와 세이사이(会沢正志斎) 등 동시대 학자들의 저술과 축을 같이 하는 사상이라는 하나 직접적인 관계는 확인할 수 없다. 그러나 서양의 선택이 계속해서 들어오는 시대 상황 속에서 그들의 사상에는 일종의 우민관(愚民觀)과 기독교를 외압의 상징으로 보고 배척해야 한다고 설득하는 점에서 많은 공통점이 보인다.

마쿠즈는 정식으로 한자를 배울 기회가 주어지지 않았던 여성이라는 특유의 경력에다 순수한 일본적 사고의 가능성을 본 역전적 발상을 가졌다는 점에서 앞으로 여성성과 <일본의식>의 관계를 연구하는 데 있어 중요한 시각을 제공한 발표였다.

【기사집필: 고바야시 후미코

(호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
研究アプローチ①「＜日本意識＞の変遷―古代から近世へ」

第 3 回研究会

「女らしさ」と国文学研究

- 報告者：衣笠 正晃（法政大学国際日本学研究所所員、国際文化学部教授）
- 日 時：2014 年 10 月 24 日（金）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：小林 ふみ子（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）

戦後の女子高等教育において国文学（日本文学）科が占めてきた役割の大きさから、今日のわれわれは「女らしさ」と国文学研究を安直に結びつけがちだが、それは果たして妥当だろうか。

鈴木登美による先行研究が明らかにするように、明治中期において国民国家体制確立の装置として国文学研究が成立するにあたり、男性である国文学者たちは、日本文学の主流と位置づけるべき和文学のもつ「女性的」性格に居心地の悪さを感じていた。芳賀矢一は国文学の「繊弱」な傾向を国語（日本語）の性質によるものとする中で、平安期における女性の手になる文学の盛行を説明する一方、「男性的」な和漢混淆文を高く評価することでバランスをとろうとした。芳賀以後の世代においても、和辻哲郎は「もののあはれ」を論じるなかで、平安女流文学のすぐれた性質をみとめつつ、女性作者たちの批評性の欠如を批判し、いわば消極的な肯定をおこなっている。岡崎義恵の場合、女性的なものと結びつけられる「あはれ」を日本的様式の根本精神を示すものとしつつも、そのなかに男性的要素を見出そうとしている。

このような平安女流文学へのアンビヴァレントな評価が積極的肯定へと転換するのは大正期である。垣内松三らによる内面性の重視、「自照文学」概念の導入に並行して、同じく E・G・モールトンに影響された英文学者・土居光知は、『文学序説』（1922 年）所収の論考のなかで「日記文学」というタームを創出し、平安女流日記を世界文学のなかに位置づけようとした。あたかも同時代の文壇における私小説・心境小説の盛行・理論化のなかで、平安期の女流日記はそれに先行するモデルとしての地位を与えられることになった。国文学者のなかでこの平安女流文学を正面から取り上げた先駆者が池田亀鑑であり、その成果は卒業論文にもとづく著書『宮廷女流日記文学』（1927 年）に情熱的・感傷的な文体で収められている。池田の師の一人、久松潜一も大正末年から平安日記文学を講義で取り上げ、それに女性の「内面生活のリズム」の描出にとどまらない「表現としての文学」の価値があるとし、「心境小説」として位置づけた。このように平安女流日記は大正期において国文学の主流に位置づけられ、カノンとしての地位を獲得したのである。

ではこのような古典女流文学は女子教育のなかでどのように生かされたのだろうか。中等教育（高等女学校）、高等教育（女子専門学校）のいずれのレベルにおいても、積極的に活用された跡はみとめがたい。中

等教育レベルでは「良妻賢母」育成という教育目標のもと、科目間の連関が重視され、古文の比率は男子の中学校に比べもともと小さかった。さらに大正期の国語教育における文芸性や自我の重視という傾向に合わせ、現代文の比重がさらに高まる結果となった。上述の久松潜一が編集した教科書（読本）はその典型と考えられる。他方高等教育レベルでは、東大出身の国文学者（平林治徳、石山徹郎、児山信一、風巻景次郎）が中心的メンバーとして関わった大阪府女子専門学校（1924 年予科開設）を例にとれば、女性らしさよりも、因習から解放された自律的人格の育成を教育目標としており、国文学を通じての女らしさの教授という動きはみとめられない。創設期の卒業論文のテーマを検討しても、国文学の女性性をとくに論じたものはごく少数でしかない。

むしろカノン化された古典女流文学の活用の方は、アカデミアの外にあったと言える。大正震災後に国文学の生き残りをかけて当時の東大国文学教室主任・藤村作によって展開されたメディア戦略は、専門雑誌『国語と国文学』、日本文学大辞典、岩波書店ほかの日本文学講座などの刊行、国文学ラヂオ講座の放送など多岐にわたるが、1930 年代に入りその延長線上に出現したのが女性向け国文学普及雑誌『むらさき』である。『源氏物語』の舞台化を機会に作られた紫式部学会を母体に 1934 年から刊行された同誌は、単なる国文学雑誌の枠を超えた総合女性誌を目指したものであった。カノンに収まった『源氏』をはじめとする平安女流文学の鑑賞を主軸に、海外の文学・芸術の紹介、さらには映画のようなポピュラー・カルチャーまでを包含することで、女性知識人・知識人予備軍の知的好奇心に訴える戦略がとられた。執筆陣も中心は国文学研究者であるものの、外国文学者や創作作家を取り込んだ、幅広い陣容が謳われていた。国文学雑誌の多くが短命に終わったなか、『むらさき』は戦争末期（1944 年）に用紙統制のため後継誌『藝苑』へと統合されるまで、10 年にわたり存続しつづけることになる。

以上に見るとおり、国文学と女性性との関係をふり返るにあたっては、戦後における文脈にもとづく先入観を排した、慎重な検討作業が欠かせない。それによって研究史から思想史、文化史へと広がる考察も可能になるはずである。

【記事執筆：衣笠 正晃

（法政大学国際日本学研究所所員、国際文化学部教授）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

3rd Research Meeting

“Femininity” and Research of Japanese Letters

Speaker: Masaaki Kinugasa (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Intercultural Communication)

Date: Friday, 24 October 2014, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Fumiko Kobayashi (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

Today we often link “femininity” to the research of Japanese literature (Kokubungaku), but is this appropriate? From the mid Meiji Period, male Kokubungaku scholars

had reservations about the “feminine” nature of traditional literature in Japanese (Wabungaku), and afforded it a negative affirmation. This turned to a positive affirmation in the Taisho Period. Since Heian women’s diaries had found their place in world literature through the terms “self-reflective literature” and “diary literature”, they also worked their way into the canon of Japanese literature. However, women’s education on both levels: secondary education (junior and senior high school) and higher education (women’s training college) taught the importance of the Taisho-period sense of self and independent nature, so that classical women’s literature did not play a role. Instead, it was utilized in the publication media, a good example being *Murasaki* (founded in 1934) which aimed to provide a general women’s journal to transcend Japanese literature (Kokubungaku) research journals. To explain the relationship of Japanese literature and femininity, serious investigative work is necessary without preconceptions, enabling a widening of the scope of consideration, from history of research to history of thought and history of culture.

Report by: Masaaki Kinugasa (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Intercultural Communication)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業（平成 22 年 -26 年）

戦略性研究基礎形成支援項目 研究方法① “‘対日認識’の变迁——从古代到近代”

第 3 次研究会

“女人气质”与日本文学研究

报告者：衣笠 正晃（法政大学国際文化学部教授）

日 期：2014年10月24日（星期五）18:30-20:30

会 場：法政大学市谷校区 58年館2層 国際日本学研究所讲习室

主 持：小林 芙美子（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）

现在我们常常很容易地就将“女人气质”与日本文学研究结合起来，但是这是否合适呢。明治中期以后的男

性文学家对于日本文学中“女性化”的性格持保留态度，给予了消极性的肯定。而由消极性的肯定转换为积极性肯定的是在大正时期。在被称为“自照文学”和“日记文学”的影响之下，平安女性日记在世界文学中取得一席之地，并被定位为日本文学的标杆。在中等教育（高等女子学校）和高等教育（女子专门学校）的女子教育层面上，古典女性文学在大正时期重视自我及自律性人格的倾向出现之前，发挥了积极的作用。其有效利用的场所就是出版媒体，其中以超越日本文学的女性综合杂志为目标的《紫》（1934创刊）就是很好的例子。在解析日本文学与女性化的关系时，去除成见并慎重讨论是不可或缺的，而这也使得考察范围由研究史向思想史、文化史扩展成为可能。

【执笔者：衣笠 正晃（法政大学国際日本学研究所所員、国際文化学部教授）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년 ~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-〈일본의식>의 과거·현재·미래

연구① <일본의식>의 변천-고대에서 근대로

제3회 연구회

‘여자다움’과 국문학 연구

보고자: 기누가사 마사아키(衣笠 正晃, 호세이대학교 국제문화학부 교수)

일 시: 2014년 10월 24일(금) 18:30~20:30

장 소: 호세이대학교 이치가야캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 고바야시 후미코(小林 芙美子, 호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 문학부 교수)

오늘날 우리는 ‘여자다움’과 국문학 연구를 간단히 결부시키려고 하는 경향이 있는데, 이것은 과연 타당한 것일까? 메이지(明治) 중기 이후 남성 국문학자는 화(和)문학이 ‘여성적’이라는 판단은 유보하면서 오로지 소극적인 긍정만을 했다. 이것이 적극적 긍정으로 전환한 것은 다이쇼(大正)기였다. 헤이안(平安)여류일기는 ‘자조(自照)문학’, ‘일기문학’이라는 용어로 세계문학 속에 정립되었고, 국문학의 카논으로 자기매김하게 되었다.

그러나 여성교육의 장이었던 중등교육(고등여학교), 고등교육(여자전문학교)에서는 다이쇼기의 자아와 자율적 인격을 중시하는 경향 속에서 고전 여류문학이 적극

적으로 활용되지는 않았다. 오히려 고전 여류문학 활용의 장은 출판 미디어였는데 국문학 잡지를 넘어서 여성 종합잡지를 목표로 한 『무라사키』(1934년 창간)가 그 좋은 예이다. 국문학과 여성성과의 관계 해명에는 선입관을 배제한 신중한 검토작업이 선행되어야 할 것이다. 이러한 작업은 연구사에서부터 사상사, 문화사로 영역을 넓혀 고찰을 가능하게 할 것이다.

【기사집필: 기누가사 마사아키

(국제일본학연구소 소원, 호세이대학교 국제문화학부 교수)】



左より：小林 芙美子氏（司会者）、衣笠 正晃氏（報告者）

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
研究アプローチ②「近代の＜日本意識＞の成立―日本民俗学・民族学の問題」

2014 年度研究会

両みんぞく学のパラダイムの検討

- 日 時：2014 年 10 月 3 日（金）～4 日（土）
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所客員所員、ボン大学名誉教授）

2014 年 10 月 3 日（金）、4 日（土）、2014 年度研究会「両みんぞく学のパラダイムの検討」が行われた。これまで、アプローチ②「近代の＜日本意識＞の成立―日本民俗学・民族学の問題」は年度ごとに次のような課題を設定して研究活動を行ってきた。すなわち、2010、2011 年度は昭和 10 年代から昭和 20、30 年代までの期間を対象に、日本が植民地を持つ帝国から、いくつかの少数民族はいるものの、ほぼ単一民族の国家に変わった時期にエスノロジーとフォークロアがどのようにパラダイムシフトを行ったかを中心に研究が進められた。2012 年度は、「日本の民族学の父」と呼び得る岡正雄の業績を討論し、ウィーン大学に提出した博士論文 *Kulturschichten in Alt-Japan* を出版した。さらに 2013 年度は、20 世紀の日本の民族学において最も重要な役割を果たした 5 人の研究者、すなわち鳥居龍蔵、澁澤敬三、金関丈夫、梅棹忠夫、そして佐々木高明を取り上げ、その業績を検討した。今回は 2010 年度から 2013 年度までの成果を総括として両みんぞく学のパラダイムを検討するため、民俗学と民族学の分野で画期をなした坪井正五郎、坪井洋文、宮田登の 3 名を対象に考察を行った。

10 月 3 日は「坪井正五郎の業績」を主題に、清水昭俊氏（国立民族学博物館名誉教授）と川村伸秀氏（編集者）が、10 月 4 日は「坪井洋文・宮田登の業績」の主題の下に福田アジオ氏（国立歴史民俗博物館名誉教授）が報告を行い、ヨーゼフ・クライナー氏（国際日本学研究所客員所員）が講演「近代の＜日本意識＞の成立―日本民俗学・民族学の問題」についてを行った。

まず、清水氏は「坪井正五郎の人類学 人類学の坪井正五郎」と題し、人類学を確立した坪井正五郎の学問上の構想の特徴と実際を検討した。具体的には、好奇心に満ちた趣味人であった坪井正五郎が東京帝国大学在学中にモースやシーボルトなどの在留外国人の取り組みを通して人類学に接するとともに、英仏への 3 年間の留学を経て東京帝大人類学講座の教授となったものの、当時の人類学講座が人材育成の機能を欠いていたため、講座を運営する実働組織である人類学教室と外郭組織の東京人類学会を通じて人材の確保と育成を行ったことが指摘された。また、坪井が留学時代に学んだ欧米の人類学の知識を総合して、専門分野へと分化・分離しない、人類の全体の理解を目指す包括的な人類学を構想したものの、各地の「人民」を民族文化と関連付けて「民族」として把握する視点を持っていなかったこと、さらに「人類学―人種学及び考古学―土俗学」という階層関係を想定しながらも土俗学を人種学に関連付ける理論的視点を欠いていたこと、あるいは包括的な人類学を構想する過程で青年期の坪井の

独創的な発想が削がれたことが説明された。そして、人類学教室で行われた人材の育成は鳥居龍蔵、八木槌三郎、松村瞭などを輩出したものの、坪井の包括的な人類学が個別の分野へと専門分化した過程であったことが示された。

次に、編集者として文化人類学者の山口昌男の著作の編集に携わるとともに 2013 年には『坪井正五郎―日本で最初の人類学者』を上梓した川村氏が「逸脱する人類学者―坪井正五郎と山口昌男」と題して発表を行い、坪井正五郎と山口昌男の足跡を「西洋との付き合い方」、「絵を描く一笑いと遊び」、「人類学と文学と」、「交流の場をつくる・利用する」、「人類学の広告塔」の 5 つの観点から対比させた。その結果、時代も環境も異なる二人が、民族学と文化人類学という学問の発展のために行った取り組み、社会との関わり方、あるいは学問の分野を超えた人的な交流の幅の広さという点で類似する要素を数多く持っていることが明らかになった。

福田氏は「坪井洋文と宮田登―アカデミック民族学確立の立役者」と題する報告を行った。まず、柳田國男が宮崎県椎葉村で実地調査を行った 1908 年に始まる日本の民俗学の歴史を概観した後、坪井洋文と宮田登の学問的な特徴が検討された。その結果、國學院大学で井之口章次が指導する民俗学研究会に入ってから柳田國男流の比較研究の手法を学んだ坪井洋文は卒業論文の主旨であった折口信夫から直感から仮説を得る方法を学び、聴講生となった東京都立大学では岡正雄流の種族的文化複合論を修得した。そして、こうした学問的な前提に基づき、日本の文化の地域差、地域性に着目して「餅なし正月」に畑作文化の痕跡を認め、柳田國男の稲作文化論を批判するという日本文化多元論研究を行った。さらに、折口流の直感によって得られた着想を照葉樹林文化論にまとめ、日本文化の起源論へと議論を進めたことが紹介された。一方、宮田登については、和歌森太郎の影響を受けた歴史主義民俗学、西山松之助の影響による近世生活文化史への取り組み、さらに文化人類学や宗教学との交流や人間関係の幅の広さを前提とし、文字資料による近世史研究、ミロク信仰の研究、地域民俗学や比較民俗学、都市民俗学、あるいは現代民俗学といった民俗学の新しい分野の開拓など、民俗学に新境地をもたらしたことが示された。そして、坪井と宮田に野口武徳を補助線として加え、民俗学が大学の正規の課程となり、さらには「落日」を経験した民俗学と民俗学者たちがどのように向き合ったかが説明された。

最後に、クライナー氏が 2010 年度以来の取り組みの成果を紹介するとともに、今後の研究のあり方が示された。

今回の研究会により、過去4年間の研究が俯瞰され、さらには真摯な討論を通して、参加者は研究の成果と今後の展望についての理解を深めることとなった。

【記事監修：ヨーゼフ・クライナー

(法政大学国際日本学研究所客員所員、ボン大学名誉教授)、

記事執筆：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】



清水 昭俊 氏 (国立民族学博物館名誉教授)



川村 伸秀 氏 (編集者)



中央：福田 アジオ 氏 (国立歴史民俗博物館名誉教授)、会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 2 “Establishment of Modern ‘Japan-consciousness’: Issues of Japanese Folklore Studies and Ethnology”

Research Meeting of 2014

Examining the Paradigm of Folklore Studies and Ethnology

Date: Friday, 3 October – Saturday, 4 October 2014

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: Josef Kreiner (Visiting Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor Emeritus, University of Bonn)

This research meeting, as a conclusion of the research results of the years 2010-2013, examined the paradigm in Japanese folklore studies and ethnology. For this purpose, presentations and debates were held on the ground-break-

ers in these two fields: Tsuboi Shogoro, Tsuboi Hirofumi, and Miyata Noboru. On 3rd October, Akitoshi Shimizu and Nobuhide Kawamura gave presentations on the theme of “The Achievements of Tsuboi Shogoro”, and on 4th October, Ajo Fukuda, on the theme of “The Achievements of Tsuboi Hirofumi and Miyata Noboru”, after which Josef Kreiner gave a keynote speech, “Establishment of Modern ‘Japan-consciousness’: Issues of Japanese Folklore Studies and Ethnology”. These showed, in practical terms, the roles Tsuboi Shogoro, Tsuboi Hirofumi and Miyata Noboru played in developing and determining folklore studies and ethnology, and also the process that secured positions for folklore studies and ethnology in the Japanese academic sphere. The research meeting on this occasion provided an overview of the research conducted over the past four years. And, through a dedicated debate, participants deepened their understanding of the research results and future visions.

Report overseen by: Josef Kreiner (Visiting Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies); report written by: Yusuke Suzumura (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業（平成 22 年 -26 年）

戦略研究基礎形成支援項目 研究方法② “近代 ‘対日认识’ 的形成——日本民俗学・民族学の問題”

2014 年度研究会

民俗学与民族学的范式讨论

日 期：2014年10月3日（星期五）-4日（星期六）

会 场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主 持：约瑟夫·克里纳（法政大学国际日本学研究所客座所员、波恩大学名誉教授）

此次研讨会作为2010年度到2013年度的成果汇总，对日本的民俗学与民族学的范式进行了讨论。以这两个领

域中具有划时代意义的坪井正五郎、坪井洋文、宫田登为对象进行了汇报和讨论。10月3日的主题为“坪井正五郎的业绩”，由清水昭俊和川村伸秀两位作了报告。10月4日的主题为“坪井洋文·宫田登的业绩”，由福田亚细亚作了报告，并由约瑟夫·克里纳作了题为“近代 ‘对日意识’ 的形成—日本民俗学・民族学の問題”的演讲。会议发言揭示了坪井正五郎、坪井洋文、宫田登在民俗学与民族学的发展和定型过程中所发挥的作用，以及民俗学与民族学在日本的学术界中确立地位的过程。通过此次研究会，对过去4年里的研究进行了整体上的把握。并且通过诚挚的讨论，加深了参会者对研究成果以及发展前景的理解。

【报道监修：约瑟夫·克里纳（法政大学国际日本学研究所客座所员）、执笔者：铃村 裕辅（法政大学国际日本学研究所客座学术研究员）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년 ~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-〈일본의식>의 과거·현재·미래

연구② 근대 <일본의식>의 성립-일본 민족학·민속학의 문제

2014년도 연구회

민속학·민족학의 패러다임 검토

일 시: 2014년 10월 3일(금)~10월 4일(토)

장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 요셉 크라이너(호세이대학교 국제일본학연구소 소원, 본 대학 명예교수)

이번 연구회에서는 2010년도부터 2013년도까지의 성과를 총괄하여 일본의 민속학과 민족학의 패러다임을 검토하기 위해 두 분야의 획기적 인물인 쓰보이 쇼고로(坪井正五郎), 쓰보이 히로후미(坪井洋文), 미야타 노보루(宮田登) 등 3명을 대상으로 한 보고와 토론이 있었

다. 10월 3일은 ‘쓰보이 쇼고로의 업적’을 주제로 시미즈 아키토시(清水昭俊)씨와 가와무라 노부히데(川村伸秀)씨가, 10월 4일은 ‘쓰보이 히로후미, 미야타 노보루의 업적’을 주제로 후쿠다 아지오(福田アジオ)씨가 보고를 하고 요셉 크라이너(Josef Kreiner)씨가 ‘근대 <일본의식>의 성립-일본 민족학·민속학의 문제’에 대해 강연을 했다.

그 결과 쓰보이 쇼고로, 쓰보이 히로후미, 미야타 노보루가 민속학·민족학의 발전과 정착을 위해 한 역할과 민속학과 민족학이 일본의 학술계에서 지위를 확립해 가는 과정이 구체적으로 드러났다. 이번 연구회를 계기로 과거 4년간의 연구가 부감되었다. 또한 진지한 토론을 통해 참가자는 연구의 성과와 향후 전망에 대한 깊은 이해를 도모할 수 있었다.

【기사 감수: 요셉 크라이너(호세이대학교 국제일본학연구소 소원), 기사집필: 스즈무라 유스케(鈴村裕輔, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
研究アプローチ③「＜日本意識＞の現在―東アジアから」

第 1 回東アジア文化研究会

韓国における日本観の変容

- 報告者：徐 賢燮（長崎県立大学国際情報学部国際交流学科前特任教授）
- 日 時：2014 年 4 月 23 日（水）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

一. 韓国人の伝統的な日本観

韓国の文献で、日本に関する部分は「倭国、倭寇、倭人、倭乱」など、「倭」が冠につく。「倭」は矮小で野蛮なイメージを含んでいるが、このような呼称は、前漢時代の『漢書』地理志などの記述を踏襲したものと見られる。

韓国人が中華文明というプリズムを通じて日本を理解し判断したために、実際の日本と観念上の日本とは相当な隔たりがあるに決まっている。7 世紀の新羅統一以後、日本は、軍事・経済面で新羅をまさる大国であった。11 世紀初め世界最初の長編小説である『源氏物語』の文学性は早くから西欧で高く評価されてきたが、朝鮮では無視された。百済から漢字を伝授された日本は、日本の『日本書紀』を『三国史記』より 400 年も先立って刊行している。

二. 日本の韓国観

日本人の歪んだ対朝鮮認識を植え付けた史料として『日本書紀』があげられる。『日本書紀』は、朝鮮半島の国々を蕃国と見なすものである。津田左右吉博士は、『日本書紀』の神代神話は、皇室の支配を正統化するため後世に創作されたものであると明らかにした。しかし、日本人の潜在意識には、『日本書紀』などに影響されて歴史認識が、これまで連綿と受け継がれてきた。

福沢諭吉の「脱亜論」が、その一例である。福沢の韓国認識は、韓国に対する蔑視、韓国史の停滞性、韓民族滅亡論に要約できる。つまり、日本はアジアの立場を離れ、欧米諸国とともにアジア諸国を侵略しながら日本の近代化を目指すという趣旨である。このような福沢の「脱亜論」は近隣諸国を見る日本の民族意識と、政府の対アジア政策に無視できない影響を与えた。

三. 朝鮮通信使の日本認識

朝鮮は明・清の交替など大きく変動する東アジアの国際情勢への対応を余儀なくされ、徳川幕府の要請で戦乱の終息からわずか 10 年後の 1607 年日本との関係を修復し、外交使節を派遣することに至った。朝鮮通信使の使行録は、例外なしに蛮人らを文と書で教化して国家威信を高めたという自画自賛の記述が主流だ。

1607 年から 1811 年に至るまで 200 年にわたって朝鮮の名のある学者が通信使として 12 回も日本を訪問し、長期滞在したにもかかわらず、「小中華」を誇り、いぜんとして日本を野蛮視、日本から積極的に学ぼうとしなかった。日本を華夷思想の単眼でしか見ることもなかった当然の結果であり、当時の朝鮮の限界であろう。

四. 「倭」から「日本」へ

1948 年 8 月大韓民国の建国に伴い、成立した李承晩政権は「反共・反日」を打ち出し、国民の支持を得た。李承晩政権下では、植民地時代に持ち込まれた日本の文化は「倭色文化」として一掃すべきものとされていた。最近では、韓国で日本料理を一般的に「日食」というようになったが、1970 年代初め頃までは「倭食」という言い方が広く使われていた。日本側の目に見えない努力によって「倭食」という語彙は次第に姿を消し、「日食」という言い方が一般化されたのである。

1960 年 4 月 19 日の学生革命後、韓国は一時的に政治的自由化を迎えることになり、1961 年 4 月韓国外国語大学に日本語学科が開設された。この政治的自由は長くは続かず、1961 年 5 月 16 日、軍事クーデターによって軍事政権が樹立された。朴正熙政権は当初から「反共」イデオロギーを前面に押し出し、経済の再建を強調することで政治権力の正当性を主張して政治基盤を固めた。その過程において「反共・反日」のうち「反日」の文字が次第に退けられるようになり、ついに 1965 年に韓日国交正常化が成し遂げられたのである。

五. 大衆文化交流

韓国では 1990 年代末まで、日本の映画・漫画等のいわゆる「日本大衆文化」の流入を、法律上規制してきたが、金大中政権が 1998 年段階的開放を決断した。2000 年、ソウル大学での日本学講座開設、韓国の大学修学能力試験への日本語科目参入などが相次いでいる。

韓国の日本大衆文化開放は、日本での「韓流」、韓国における「日流」をもたらした。日本における韓流と同様、韓国でも、日本のアニメや小説等を愛好する「日流」が韓国人の生活にごく自然に溶け込んでおり、両国の市民レベルの心理的距離は相当に縮まっていると言われる。現在は、日韓の政治・外交が緊張したとしても、文化・人的交流もたちまち連動して冷え込むという構造ではなくなっている。

結びに

長いスパンから見ると韓国と日本との関係は曇ったり晴れたりしながらも前を向いて発展してきたと言える。歴史的に「蕃国」と「倭国」と互いににらみ合った両国が自由民主主義や市場経済等の価値観を共有するに至った。

両国が過去の不幸な歴史を乗り越えて、和解と善隣友好協力に基づく未来志向的な関係を発展させるため、お互いに努力することが時代の要請である。今後、

未来志向的な関係を構築するためには、韓国と日本が互いに相手に対する Disregard, Distrust, Dislike の態度から「Dis」を取り除いて Regard, Trust, Like へ発展させようとする真摯な努力が求められる。

【記事執筆：徐 賢燮

(長崎県立大学国際情報学部国際交流学科前特任教授)】



報告者：徐 賢燮 氏

(長崎県立大学国際情報学部国際交流学科前特任教授)

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

1st East Asian Culture Research Meeting

Changes in View of Japan in Korea

Speaker: Hyunseop Seo (Former Specially Appointed Professor, Department of International Relations and Cross-cultural Communication, Faculty of Global Communications Nagasaki Prefectural University)

Date: Wednesday, 23 April 2014, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B

Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Korean people's consciousness of Japan comes with mixed feelings of superiority and inferiority. The twelfth-century Korean *History of the Three Kingdoms* records that “In the year 670, Wakoku changed its name to Nihonkoku (Kingdom of Japan)”, yet in Korea, “Wakoku”

[the name given it under ancient Chinese rule] remained widely used.

In its long history of exchange with Japan, Korea has never succeeded in understanding Japan in either an objective or subjective way. Because Koreans judged Japan within the framework of “Sojunghwa” thought (“Petit Sino-centricism”), there was always a decisive gap between the real Japan and the perceived Japan. Korean intellectuals took pride in “Sojunghwa”, and never sought to learn in a positive way from Japan.

Although Korea-Japan relations reveal a long period of contemptuous name-calling: “Bankoku (barbarian kingdom)” and “Wakoku” respectively, we can say that both have developed looking forward. They share the principles of democracy and human rights etc., and we now see an era of increasingly settled mutual exchange through the so-called “Nichiryu (Japanese Wave)” and “Kanryu (Korean Wave)”.

In order for the two countries to build a future-oriented relationship, we need committed efforts to change the attitudes towards each other from “Disregard”, “Distrust” and “Dislike”, to “Regard”, “Trust” and “Like”.

Report by: Hyunseop Seo (Former Specially Appointed Professor, Department of International Relations and Cross-cultural Communication, Nagasaki Prefectural University)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業（平成 22 年 -26 年）

戦略研究基礎形成支援項目 研究方法③ “‘対日認識’の現状——以东亚地区为中心”

第 1 次东亚文化研究会

韩国的日本观的变化

报告者：徐 贤燮（长崎县立大学国际信息学院国际交流学系前特任教授）

日 期：2014年4月23日（星期三）18:30-20:30

会 场：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室

主 持：王 敏（法政大学国际日本学研究所专任所员、教授）

韩国人的对日意识中夹杂着优越感和自卑感。在12世纪韩国的《三国史记》中，虽然明确地记录着“670年

倭国改国号为日本国”，但是在韩国“倭国”的称呼依然被广泛地使用过。

事实上，韩国在与日本的长期交流中，并没有能够对日本进行客观且主体性的认识。因为韩国人从“小中华思想”的框架出发对日本进行理解和判断，所以实质上的日本与观念上的日本有着很大的差异。朝鲜的知识分子自负为“小中华”，因而并没有积极地向日本学习。

从长期视角来回溯韩日关系，可以说是“藩国”和“倭国”一边相互对峙一边向前发展的过程。到现在两国在民主主义以及人权等价值观上实现了共有，被称为“日流”与“韩流”的相互交流也迎来了稳定的发展时期。

今后，为了构筑未来型的两国关系，必须努力由不关注、不信任、不喜欢的态度向关注、信任、喜欢的方向转换。

【执笔者：徐 贤燮

（长崎县立大学国际信息学院国际交流学系前特任教授）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업 (2010년 ~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토- <일본의식>의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제1회 동아시아문화연구회

한국의 일본관 변용

보고자: 서 현섭(徐 賢燮, 전 나가사키현립(長崎県立)대학교 국제교류학과 특임교수)

일 시: 2014년 4월 23일(수) 18:30~20:30

장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

한국인의 일본에 대한 인식은 우월감과 열등감 등이 뒤섞여 있다. 12세기에 편찬된『삼국사기』를 보면 ‘670년, 왜(倭)국이 국호를 일본국으로 개칭했다’고 명기되어 있으나, 한국에서는 여전히 ‘왜국’이란 말이 널리 사용되었다.

사실, 한국은 일본과의 오랜 교류에서 일본을 객관적이고 주체적으로 인식하는 데 성공하지 않은 듯 보인다. 한국인이 ‘소중화사상(小中華思想)’의 틀에서 일본을 이해하고 판단했기 때문에 실상의 일본과 관념상의 일본에 상당한 격차가 있는 것은 당연하다. 조선의 지식인들은 ‘소중화’를 자부하며 일본으로부터 적극적으로 배우려 하지 않았다.

긴 스캔에서 한일 관계를 되돌아보면 ‘번국(蕃國)’과 ‘왜국’이 서로 대립하면서도 미래를 향해 발전해 왔다고 할 수 있다. 양국은 민주주의와 인권 등의 가치관을 공유하고 ‘일류(日流)’와 ‘한류(韓流)’로 불리는 상호 교류가 정착해 가고 있는 시기를 맞이하고 있다.

앞으로 양국이 미래 지향적인 관계를 구축하기 위해서는 상대에 대한 Disregard, Distrust, Dislike한 태도를 Regard, Trust, Like로 발전시키려는 진지한 노력이 요구된다.

【기사집필: 서 현섭

(전 나가사키현립대학교 국제교류학과 특임교수)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
研究アプローチ③「＜日本意識＞の現在―東アジアから」

第 2 回東アジア文化研究会

昭和維新運動とアジア主義

- 報告者：筒井 清忠（帝京大学文学部日本文学学科教授）
- 日 時：2014 年 5 月 28 日（水）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

1918（大正 7）年に設立された老社会と翌年設立の猶存社とが昭和維新運動の源流である。老社会参加者は、満川亀太郎、大川周明、大井憲太郎、高島素之、堺利彦、榎藤成卿らである。中心人物の満川は若い時に社会主義の傾向が強かったが「日本の革命はどうしても錦旗を中心としたものでなければならぬ」と考えた人である。アジア解放・人種差別撤廃の運動を生じ、困窮生活者の調査研究・待遇改善活動にも連携していた。満川においてはナショナリズムとアジア主義と社会主義は渾然一体であった。

もう一人の中心人物大川もやはり若い時に社会主義の影響を受けたが、東大宗教学を卒業、ヘンリー・コットン『新インド』を読んでインドの現況を知るにつけその独立運動に挺身を始め、日本におけるインド独立運動・アジア主義運動のリーダーとなりつつあった。

老社会の活動は活発に続けられたが、性格が曖昧化したので、満川と大川が結成することにしたのが猶存社であった。猶存社の綱領は「革命日本の建設、亜細亜解放運動、各国改造状態の報道批評」などであった。そして、北一輝を迎えるため大川は上海に赴く。

北一輝は若くして『国体論及び純正社会主義』を書きながら発禁となりその後中国革命に挺身、挫折後、上海にいた。北を訪れた大川は、執筆中の『国家改造案原理大綱』を持して帰国、これは 1923 年に『日本改造法案大綱』の名で公開された。天皇の名の下にクーデターを起し、全国に戒厳令を敷く。国内施策としては、華族制度等廃止、治安警察法等廃止、私有財産制限・国有化、自作農創設・労働者の待遇改善等が、対外政策としてはアジアの植民地の積極的解放が、謳われていた。

猶存社は 1920 年、機関誌『雄叫び』を発刊、日の会（東京帝大）、潮の会（早稲田大学）、東光会（五高）など各大学・高校に支部を結成、運動を拡大して行った。日の会は 1921 年 6 月、東大で「アタル氏追悼印度問題講演会」を開催、神戸の労働争議を支援するなど「革新的で、インドの革命やアジアの解放につながる民族主義運動」を展開した。

1921 年、北の影響を受けた青年朝日平吾による安田財閥当主安田善次郎刺殺事件が起きた。朝日は「奸富を誅する」ことにより「万民平等の実を挙げる」ことを説いていた。

その後、ワシントン軍縮の軍人受難時代に西田税ら青年将校の北らへの運動の加盟が始まった。1923 年、ヨッフェ来日の際、対露政策をめぐり北と大川・満川が対立、3 月猶存社は解散。1925 年、大川は行地社を設立したが、その綱領は「有色民族の解放」「世界の道義的統一」等であった。その後、大川は佐官級に

接近、北はいつそう青年将校と近くなった。

さて、大正末期以降満蒙問題が浮上しアジア主義に微妙な変化があったが、彼らの一貫した基調は変わらなかった。満川の立場は「関東州租借が東洋平和を害するなら返還するがそうではない」というものであり、大川は「満蒙は生存のために必要なのではなく東洋平和のための担保。日本の撤退は満州を修羅場と化す」としていた。

北はもともと満州領有論であった。「日本がロシアの脅威から中国を守っている。日中連携してソ連に当たるべきだが、現実には中ソ連携なので満州事変を肯定する。そして米資本による日中提携を模索する」というものであった。

1930 年に満川はアジア主義的人材養成のため興亜学塾を設立。大川は 1938 年満鉄東亜経済調査局付属研究所を設立、アラビア語講師は井筒俊彦、前嶋信次も調査局勤務であり、戦後の日本のオリент学はここで築かれた。

1930 年に参謀本部の橋本欣五郎中佐が桜会を結成するが、そのイデオログは大川周明であった。大川と桜会は三月事件・十月事件とクーデター未遂事件を繰り返し、大川は五・一五事件で捕まる。青年将校と近くなった北は二・二六事件に連座、1937 年銃殺される。

昭和維新運動においては、一貫した思想は平等主義であり、国内的「無産者」と国際的「無産者」は同一視され、彼らを抑圧する国内的・国際的「特権階級」は打倒対象であった。具体的には、国内的「弱小隷従階級」と国際的「弱小隷従地域」（アジア）が、国内の「親英米派的重臣・財閥等特権階級」と「植民地支配特権大国」と戦い倒すという図式となる。

従って、昭和維新運動の台頭は国内の「親英米派」の衰退に結びつく。二・二六事件後の 1938 年、近衛内閣は「東亜新秩序声明」すなわち帝国主義・植民地主義を否定し、アジアとの連帯を強調した声明を発表した。近代日本史上アジア主義がはじめて日本の国策に取り入れられたもので、それこそこうした思想の広汎化から出てきたものであった。これは一方で、翌年 7 月の日米通商航海条約破棄を導き出し日米戦争の一因となるし、その後松岡洋右外相による「大東亜共栄圏」となって「日本盟主的」な重要な変化を遂げる。

こうしてみると、昭和維新運動とアジア主義は常に両義性を内包した存在であったと言える。

【記事執筆：筒井 清忠

（帝京大学文学部日本文学学科教授）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
 Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

2nd East Asian Culture Research Meeting

The Showa Restoration Movement and Pan-Asianism

Speaker: Kiyotada Tsutsui (Professor, Faculty of Liberal Arts Division of Japanese Cultures, Teikyo University)

Date: Wednesday, 28 May 2014, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B

Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The Showa Restoration Movement originated in the Yuzonsha group founded in 1919. Its central figure, Mitsuoka Kametaro combined Pan-Asianism and socialism. The lead supporter of the Indian Independence Movement

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業（平成 22 年 -26 年）

戦略研究基礎形成支援項目 研究方法③ “‘対日認識’の現状——以東アジア地区を中心”

第 2 次東アジア文化研究会

昭和維新運動とアジア主義

報告者：筒井 清忠(帝京大学文学系日本文化专业教授)

日 期：2014年5月28日(星期三) 18:30-20:30

会 場：法政大学市谷校区 布瓦索納德大廈25层 B会议室

主 持：王 敏(法政大学国际日本学研究所专任所员、教授)

1919年成立的犹存社是昭和维新运动的源流。作为中心人物的满川龟太郎将亚洲主义与社会主义进行了一体

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업 (2010년 ~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토- <일본의식>의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제2회 동아시아문화연구회

쇼와유신 운동과 아시아주의

보고자: 쓰쓰이 기요타다(筒井 清忠, 테이쿄(帝京)대학교 문학부 일본문화학과 교수)

일 시: 2014년 5월 28일(수) 18:30~20:30

장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

쇼와유신(昭和維新) 운동의 원류는 1919년에 설립된 유존사(猶存社)이다. 중심인물인 미쓰카와 가메타로(滿川龜太郎)의 사상은 아시아주의와 사회주의가 명확히 구별되어 있지 않았다. 오카와 슈메이(大川周明)는 인도의 독립운동을 지원하는 리더였고, 기타 잇키(北一輝)는 『일본개조법안대강(日本改造法案大綱)』을 저술하며 쿠데타로 국내의 평등화와 아시아의 해방을 주장했다. 워싱턴 군축 시대에 청년장교였던 기타는 이 운동에 가담하기 시작했다. 오카와는 좌관급(佐官級)에 접근, 쿠데타 미수 사건을 반복하다 체포된다. 청년장교와 가까워진 기타는 2·26사건에 연루되어 처형되었다.

1938년 고노에 내각(近衛内閣)은 제국주의를 부정하

was Okawa Shumei. *Nihon kaizo hoan taiko* (A general outline for the reorganization of Japan) was written by Kita Ikki, and advocated national equality through coups d'etat, and the liberation of Asia. The young officer, Kita's affiliation with the movement began in the era of Washington Disarmament. Okawa belonged to the field grade. Okawa was caught making repeated coup attempts. Kita, who had formed ties with young officers, was implicated in the February 26th [1936] Incident.

In 1938, the Konoe Cabinet condemned imperialism, and made an announcement emphasizing solidarity with Asia. Pan-Asianism was included in Japanese national policy for the first time. The move stemmed from the generalization of this thinking. It provoked America, led to the scrapping of the Japan-U.S. Treaty of Commerce and Navigation, and became one cause of the American-Japanese War. It was used to form the “Greater East Asia Co-prosperity Sphere” by Foreign Minister Matsuoka Yosuke, and achieved important changes towards Japanese hegemony.

We could say that these two individuals stood for constant ambiguity.

Report by: Kiyotada Tsutsui (Professor, Faculty of Liberal Arts Division of Japanese Cultures, Teikyo University)

化。大川周明则是支持印度独立运动的带头人。北一辉在《日本改造法案大纲》中，赞扬了通过政变来实现国内平等化以及亚洲解放。受华盛顿海军条约的影响，青年军官开始参加北一辉的运动，大川周明也开始接近校级军官。然而与青年军官接近的北一辉因二·二六事件受到牵连，大川周明也由于多次的政变未遂而被捕。

1938年，近卫内阁发表了否定帝国主义强调亚洲联合的声明。亚洲主义初次作为日本的国策被采用，这也正是该种思想的广泛化所带来的结果。这一点刺激了美国，成为了废除日美通商航海条约以及日美开战的原因之一。同时也促使了松冈洋右的“大东亚共荣圈”、以及“日本盟主式”的变化的产生。

可以说两者始终都包含着两面性。

【执笔者：筒井 清忠(帝京大学文学系日本文化专业教授)】

고 아시아와의 연대를 강조하는 성명을 발표했다. 이는 아시아주의가 처음으로 일본의 국책에 도입된 것이며, 게다가 이런 사상이 광범하게 퍼지면서 일어난 일이다. 이것이 미국을 자극해 일미통상항해조약의 파기를 도출하면서 일미 전쟁 발발의 한 원인이 되었으며, 마쓰오카 요스케(松岡洋右) 외무상에 의해 ‘대동아 공영권’이 되어 ‘일본 맹주적’인 중요한 변화를 이루어 냈던 것이다. 양자는 항상 양의성을 내포하고 있었다고 할 수 있다.

【기사집필: 쓰쓰이 기요타다

(테이쿄대학교 문학부 일본문화학과 교수)】



報告者：筒井 清忠 氏（帝京大学文学部日本文化学科教授）

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
研究アプローチ③「＜日本意識＞の現在―東アジアから」

第 3 回東アジア文化研究会

世界の日本観の変遷・・・米欧アジアの知識人との対話から

- 報告者：会田 弘継（一般社団法人共同通信社特別編集委員）
- 日 時：2014 年 6 月 25 日（水）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

「世界に良い影響を与えている国」を選ぶ世論調査がある。英 BBC 放送が 25 カ国を対象に行っている。2012 年には日本は 1 位だった。今年は 5 位に下がった。

25 カ国の調査の内訳を覗くと欧米アジアの多くの国が日本を好ましく見ている。ただ、中国と韓国でそれぞれ 90%、80% が日本を否定的に見ており、両国が全体での日本への好印象の足を引っ張り、日本の順位を下げている。

最も近い中国・韓国と関係が良くない。これが日本のイメージの問題だ。歴史問題や領土問題が原因である。

最も重要な同盟国である米国の日本に対する印象はどうか。外務省が毎年行っている米国の対日世論調査によると、長期的トレンドとして、「日本を信頼できる友邦」と答える人は増え続けてきた。1960、70 年代には 30～40% だったのが、いまでは 80%、有識者に限れば 90% に達する。ただ、昨年一般市民の評価が少し下がったのは、尖閣諸島をめぐる中国との争いに巻き込まれたくないという気持ちからかもしれない。

日米安保条約の重要性を問うと米市民や有識者の 8～9 割が重要と見ていることが分かる。ただ「条約を維持すべき」という人は、昨年急に下がって 7 割程度になった。明らかに尖閣での衝突に巻き込まれるのを警戒している。

アジアで最も重要なパートナーはどの国かと米国人に問うと、かつては日本が断然トップだったが、最近では中国が日本を少し上回るようになった。ただ、その理由を問うと日本の場合は政治・経済・文化とさまざまな理由で大事なパートナーとなっているのに、中国の場合は経済的つながりが理由として突出している。やはり、アメリカは広い意味で日本を大切なパートナーと見ている。

東南アジア諸国連合（ASEAN）の主要 7 カ国での調査でも、最も信頼できる国は日本は 33% で一位、二位米国の 16% を大きく離している。中国は 5% だ。インドネシア、ベトナム、タイでの支持が高い。

このように、日本は世界からかなり良い印象で見られている。世論調査の数字で見るとそうなる。しかし、こうした数字は急に変わるかもしれない。

より奥深く日本への印象を探りたいと思って、2007 年から昨年末まで、世界の 81 人の知識人にインタビューして、日本への印象や日本とのかかわりをじっくりと聞いてみた。政治家や文化人、日本研究者などだ。毎月新聞 1 ページ相当の記事を全国の地方紙に配信した。

なぜそうしたインタビューを行ったかという、次のような問題意識に基づいたからである。ある国の国民の日本観はどう形成されるか。メディアに登場する知識人（政治指導者も含む）たちの発言などが大きな影

響を与えているだろう。それらの知識人たちの日本観は往々にして、その国の日本研究者の日本観を参照しているだろう。

最初の頃は、著名なアジアの政治家たちに会ってみた。韓国の金大中氏、シンガポールのリー・クアンユー氏、マレーシアのマハティール氏らだ。それぞれ、非常に印象的だった。日本について雄弁に語ってくれた。

金大中氏は、日本の植民地時代に教育を受けているが、自分に政治家として信念を据えてくれたのは、木浦商業学校時代の日本人の先生の言葉だった。「原則をもって生きよ」という教えで、波乱の政治家生活でくじけそうになるたびにその言葉を思い出して、がんばったという。金大中事件の時は日本の知識人や市民が釈放を求めてデモなどの行動を起こしたことに、深い感謝の念を抱いていた。

リー・クアンユー氏は、シンガポールの今日の発展の基礎を築くのを助けてくれたのは日本だという話を具体的にしてくれた。小さな都市国家を産業国家にするため、1970 年代に石油コンビナート誘致を計画し、福田赳夫首相と日本の企業人の助けで、その第一歩を踏み出した思い出を語った。

マハティール氏は、同じ頃マレーシアの発展のモデルは日本しかないと考え、「ルック・イースト」政策を導入した。日本がデフレに陥った後も「ルック・イーストだ」と言う。「日本の失敗から学べ」と皮肉を言った。だが、東日本大震災が起きた時、すぐに日本を励ますため共同通信に寄稿してくれたのを忘れることができない。

インタビューの対象者で最も多かったのは米国人で 22 人に及んだ。自分の仕事の都合もあって、そうだった。時間がなくて、米国人の日本観について気づいた点をまとめてお話しした。

最近の米国の日本学は、米国と日本の近代化は並行して進んできた、というような前提を持って、日本を見ているように思える。

米国の本格的近代化は南北戦争を経て始まる。日本は明治維新で近代化が本格化する。それ以前は両国とも「半近代」状態だった。

ともに 1860 年代に近代化を本格化させ、その後の産業発展過程は似ている点も多い。また帝国主義に入るのも、日本の場合は日清戦争、米国は米西戦争で、ともに 1890 年代だ。太平洋を挟んで近代化を進めた両国が第 2 次大戦で激突した。しかし、その後深い関係を結んだのは、興味深い。

こうした視点を、ジョン・ダワー氏やアンドルー・ゴードン氏といった日本学者との対話で学んだ。

【記事執筆：会田 弘継（一般社団法人共同通信社特別編集委員）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

3rd East Asian Culture Research Meeting Changes in World View of Japan: Dialogue with Intellectuals of the U.S., Europe and Asia

Speaker: Hirotugu Aida (Senior Columnist, Kyodo News)
Date: Wednesday, 25 June 2014, 18:30-20:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonnade Tower 25F Conference Room B
Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Japan has a fairly good international image in gen-

eral. In worldwide opinion polls carried out by the UK's BBC, it has most recently been voted top of “countries with a good influence upon the world”. However, 80-90% of respondents in China and Korea regard Japan as negative. The American people's image of Japan is extremely good. Recently, 80-90% answered that the Japan-U.S. Security Treaty is “important”. Yet last year this figure suddenly fell to 70%: probably from a desire for non-involvement in the Japan-China dispute of the Senkaku Islands. In search of the background to foreign images of Japan that cannot be understood from opinion polls, I spent seven years carrying out interviews with 81 politicians and academics. Not all their content could be touched upon; however, I discovered that political leaders who brought about post-war Asian development, like former Korean President Kim Dae Jung, hold quite pleasing images of Japan. What was interesting in my conversations with American scholars of Japan (John Dower etc.) was hearing about the parallels with America seen in Japanese modernization.

Report by: Hirotugu Aida (Senior Columnist, Kyodo News)

文部科学省私立大学戦略性研究基盤形成事業（平成 22 年 -26 年）
戦略研究基盤形成支援項目 研究方法③ “‘対日認識’
の現状——以东亚地区为中心”

第 3 次东亚文化研究会

世界の日本観の变迁…从欧美及亚洲的 知识分子之间的对话出发

报告者：会田 弘継（一般社団法人共同通信社特別編集委員）

日 期：2014年6月25日（星期三）18:30-20:30

会 場：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室

主 持：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

日本の国際印象から整体上来说は非常好的。在英国 BBC 题为“对世界造成良好影响的国家”的舆论调查中，日本最近占据了首位。但是在中国和韩国，对日本持否定看法的人达到 8~9 成。美国人对日本的印象也十分好，认为日美安保条约重要的人达到了 8~9 成。只不过，这一数据在去年急剧下降到了 7 成，由此可以看出美国人不愿意卷入围绕钓鱼岛的中日纷争这一心理。为了弄清舆论调查所不能反映的海外各国对于日本的印象，在这 7 年间对 81 名政治家及学者进行了采访。虽然不能说面面俱到，但以已故韩国总统金大中为代表的、实现了战后亚洲发展的政治领导人，对于日本都持有非常好的印象这一点是可以肯定的。此外，在与美国学者的对话中，笔者对于日本的近代化是与美国是平行的这一论调深感兴趣（约翰·道尔等）。

【执笔者：会田 弘継（一般社団法人共同通信社特別編集委員）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업 (2010년 ~2014년)
국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토- <일본의식>의 과거·현재·미래
연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제3회 동아시아문화연구회

세계의 일본관 변천

-미국·유럽·아시아 지식인과의 대화에서

보고자: 아이다 히로쓰구(会田 弘継, 일반사단법인 교도(共同)통신 특별편집위원)

일 시: 2014년 6월 25일(수) 18:30~20:30

장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

일본의 국제적 이미지는 전반적으로 상당히 좋다. 영국 BBC가 시행한 ‘세계에 좋은 영향을 주고 있는 나라’를 묻는 세계적인 여론 조사에서도 최근 1위를 차지했다. 다만, 중국·한국에서는 80~90%가 일본을 부정적으로 보고 있다. 미국인의 대일 이미지는 매우 좋다. 일·미 안보에 대해서는 최근에는 80~90%가 ‘중요’하다고 대답했다. 그런데 지난해 갑자기 70%로 떨어졌다. 센카쿠를 둘러싼 일·중 분쟁에 관여하고 싶지 않다는 심리가 엿보인다.

여론 조사로는 알 수 없는, 해외에서 형성된 일본 이미지의 배경을 살펴보기 위해 지난 7년간 81명의 정치가

와 학자들을 인터뷰했다. 모든 내용을 언급할 수는 없으나, 한국의故 김대중 대통령을 비롯한 전후 아시아의 발전에 기여해 온 정치 지도자들은 일본에 대해 상당히 좋은 이미지를 갖고 있는 것으로 나타났다. 미국의 일본 학자들과의 대화에서 흥미로웠던 것은, 일본의 근대화가 미국과 동시에 진행됐다고 보는 의견이 있었다는 점이다(존 다우어 등).

【기사집필: 아이다 히로쓰구

(일반사단법인 교도통신 특별편집위원)】



報告者：会田 弘継氏
(一般社団法人共同通信社特別編集委員)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
研究アプローチ③「＜日本意識＞の現在―東アジアから」

第 4 回東アジア文化研究会

台湾における日本研究の変容

- 報告者：于 乃明（国立政治大学外国語文学部日本語文学科教授）
- 日 時：2014 年 7 月 28 日（月）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

各校の課程実施状況

2014 年現在、台湾全国の大学数は 165 校である。そのうち、日本語学科を設置しているのは 46 校であり、全大学の約 4 分の 1 に当たる。

かつて台湾の大学の日本語学科及び修士課程では、主に文学や言語の科目を中心にカリキュラムが構成されていた。しかし、交流協会奨学金の選考に利用される日本留学試験では、2003 年以降、受験科目としての日本文学が受験科目から除外された。それを境目として、各大学は、従来の言語、文学科目のほかに、歴史、文化、政治、経済など、さまざまな分野を取り入れたカリキュラムを編成するようになった。特に、当時台湾のビジネス界で日本語が使える人材の需要が高まってきたことを踏まえ、従来の日本語文学系とは異なる、実用性に重きを置いた応用日本語学科が次々と設けられるようになった。

台湾で著名な大学の日本語学科において近年開設される日本研究関連の科目である（語学、文学を除く）。日本史、文化、社会、思想、経済、宗教、政治、外交、地理、流行文化、経営学、台日関係など、きわめて多様である。大学院では、各領域、時代の文献講読、比較文化研究、近代日本文化、アジア各時代の特定課題研究、日本社会文化論、ならびに台日社会文化交流史など幅広い領域の科目を開設し、基本知識の導入と専門領域の研究に重点が置かれている。

台湾の日本語教育と日本研究に関する学会

1. 中日関係研究会 1971 年に設立
2. 台湾日本研究学会 1979 年に設立
3. 台湾日本語文学会 1989 年に設立
4. 台湾日語教育学会 1993 年に成立
5. 台湾日本言語文芸研究学会 1997 年に設立
6. 台湾翻訳学学会 1997 年に設立
7. 台湾応用日語学会 2002 年に南台湾で設立
8. 現代日本研究学会 2010 年に設立

各大学の特徴と日本研究に関する学報

東呉大学と銘傳大学の日本語文学系では日本語教育と日本語学が柱となっている。輔仁大学では日本古典文学が、台湾大学では本来日本語学と日本文学が中心であったが、現在は日本歴史と日本文化にも重点をおくようになった。政治大学、淡江大学、文化大学においては文学、語学のほかに日本文化、日本歴史、日本政治、日本外交、日本思想などの専門分野の教師が多数である。

これまでの台湾の日本語学界では日本語学と日本文学の研究が中心であったが、ここ数年来、日本研究も

次第に広い分野から注目されるようになってきた。日本語学界では主な学術論文誌に『台湾日本語文学報』と『台湾日本語教育論文集』があり、さらに政治大学の『政大日本研究』、台湾大学の『台大日本語文研究』、東呉大学の『東呉日語教育学報』、輔仁大学の『日本語日本文学』、淡江大学の『淡江日本論叢』、文化大学の『中日文化論叢』、東海大学の『日本語文学系学刊』、静宜大学の『日本学と台湾学』、銘傳大学の『銘傳日本教育』など各大学の紀要には、日本歴史、日本文化に関する研究論文も掲載されている。

日本研究センター

日本交流協会（2003 年）『日本研究調査報告書』と、2010 年に早稲田大学台湾研究所から発行された『台湾における日本研究―制度化の現状、課題と展望』の 2 冊は、ともに台湾における日本研究について、実地調査に基づいてまとめられた報告書である。いずれも、台湾での日本研究の現状と問題点を明確に指摘している。台湾国内では、1963 年に文化大学で日本語学科が設置されて以来、約 50 年の歳月を経ているが、社会科学系の日本研究が未だ十分に発達していないと言われている。

2009 年から国際交流基金の援助の下で、台湾国内の大学で、8 つの日本研究センターが開設された。

1. 政治大学：日本研究センター（2009 年）
2. 台湾師範大学：日本研究センター（2010 年）（2012 年廃止）
3. 中興大学：日本総合研究センター（2010 年）
4. 中山大学：日本研究センター（2010 年）
5. 東海大学：学際的複合日本地域研究センター（2011 年）
6. 輔仁大学：日本研究センター（2012 年 6 月）
7. 台中科技大學：日本研究センター（2012 年 12 月）
8. 台湾大学：日本研究センター（2013 年 8 月）

学部を超えて、国を超えて（東アジア）

向こう 5 年間のうちに、台湾での日本研究には新たな局面が見えてくると考えられる。特に、分野横断的な研究が盛んに行われる傾向がある。台湾国内では、台湾大学、政治大学、淡江大学、輔仁大学などの例に見られるように、中国、日本、韓国の大学と連携し、院生の共同指導を図るという風潮が高まっている。さらに、各分野の専門家を招聘し、講演会や集中講義などを実施している。

グローバル化、学際・領域横断的研究、国際移動

現在台湾においては日本研究及び日本留学は、もは

や日本語学科の学生、卒業生の唯一の選択肢ではない。グローバル化や学際横断的研究が盛んになった現在の学習・研究環境では、日本語学科の学生はいうまでもなく、非日本語専攻学生でも、誰もが日本研究に従事することが可能である。その意味で、ダブル・メジャー

あるいは副専攻の制度は、今後の日本研究の発展にも寄与するものと考えられる。

【記事執筆：于 乃明

(国立政治大学外国語文学部日本語文学科教授)】



報告者：于乃明氏
(国立政治大学外国語文学部日本語文学科教授)



会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
 Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

4th East Asian Culture Research Meeting Changes in Japanese Studies in Taiwan

Speaker: Naiming Yu (Professor, Department of Japanese, College of Foreign Languages and Literature, National Chengchi University [Taiwan])
 Date: Monday, 28 July 2014, 18:30-20:30
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B
 Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Taiwan used to have just four universities with Japanese language departments. Among the National Universities, Chengchi University was the first to establish Japanese in its Eastern Language and Literature Department in 1989. This opened a new road in the history of Japanese education. Today in Taiwan, 46 universities are equipped

with departments connected with Japanese, and 18 universities provide a Master's course. Only Soochow University had a Doctoral course, but the Japan Studies Department of the International Graduate School at Chengchi University plans to implement a Doctoral course from September this year (2014).

Up till now, the sphere of Japanese language education in Taiwan has mainly brought up students on literature, with few students entering into history and culture etc., and even less in the fields of politics, diplomacy and economics. However, to accompany changes in the social environment, Chengchi University created its Center for Modern Japan Studies in 2009, and since then, 10 more such Centers have come into being, including one at Taiwan University.

Today, through demand for learning and research that transcends departments, it is possible for Japanese Department students to obtain units from other departments, and thus to take a double major, or sub-specialization. The area of Japanese Studies will become increasingly diverse, and indeed flourish in this way.

Report by: Naiming Yu (Professor, Department of Japanese, College of Foreign Languages and Literature, National Chengchi University [Taiwan])

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業（平成 22 年 -26 年）

戦略研究基礎形成支援項目 研究方法③ “‘対日認識’の現状——以东亚地区为中心”

第 4 次东亚文化研究会

台湾の日本研究の変化

報告者：于 乃明（台湾政治大学外国語学院日本語文学系教授）

日 期：2014年7月28日（星期一）18:30-20:30

会 場：法政大学市谷校区 布瓦索納德大廈25層 B 会議室

主 持：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

以前在台湾有日語学科の学校僅有四所。在台湾の公立大学中、1989年政治大学首次在東方語文学科中成立了

日語組、开辟了日語教育史上的新里程。今天台湾共有46所大学开设了与日語相关的学科、18所学校设立了硕士课程。原来仅有东吴大学设有博士课程、但2014年9月政治大学国际事务学院中也设立了日本研究博士学位学程。

至今、台湾の日語教育是以語言、文學为中心对学生进行培养、在历史、文化等领域的学生较少、政治、外交、经济等领域就更少了。但是、为了适应社会环境的变化、自2009年政治大学当代日本研究中心成立以来、在台湾的大学以及研究中心先後共成立了十所日本研究中心。

由于今日超越学科的学习和研究越来越被看重、日語学科的学生选修其他学科的学分、拿双学位以及选择副专业等成为可能。如此、相信日本研究的领域会变得越来越丰富和多元化。

【执笔者：于 乃明

（台湾政治大学外国語学院日本語文学系教授）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업 (2010년 ~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토- <일본의식>의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제4회 동아시아문화연구회

타이완의 일본연구 변용

보고자: 유 나이밍(于 乃明, 국립정치대학교 일본어학과 교수)

일 시: 2014년 7월 28일(월) 18:30~20:30

장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

예전 대만에는 일본어학자가 있는 학교가 4개교뿐이었다. 국립대학교 중에서는 1989년 정치대학교 처음으로 동방문학과 안에 일본어 반을 설치해 일본어 교육사

에 새로운 길을 열었다. 현재는 46개 대학이 일본어 관련학과를 개설하고 18개 대학이 석사과정을 마련했다. 박사과정을 설치한 것은 동우(東吳)대학뿐이었으나, 올해(2014) 9월 정치대학 국제사무학원 일본연구학 과정에도 박사과정을 설치할 예정이다.

지금까지 대만의 일본어 교육계에서는 언어, 문학 등을 중심으로 학생을 육성했기 때문에 역사, 문화 등의 영역에 학생 수가 적었고, 정치, 외교, 경제 분야에서는 더 적었다. 그러나 사회 환경의 변화에 따라 2009년 정치대학에 일본연구센터가 설립된 이래, 타이완대학교 등 10 곳에 일본연구센터가 설립되었다.

요즘은 학과를 넘어선 학습과 연구가 요구되기 때문에 일본어학과 학생이 다른 학과의 학점을 취득해 복수전공이나 부전공으로 이수할 수 있게 되었다. 이로써 일본연구의 영역도 점점 다원화해 갈 것이며 풍부해질 것이다.

【기사집필: 유 나이밍 (국립정치대학교 일본어학과 교수)】

第 5 回東アジア文化研究会

中国における日本研究の変容―北京大学を例として

- 報告者：孫 建軍（北京大学外国語学院准教授）
- 日 時：2014 年 8 月 6 日（水）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

一、北京大学における日本研究の伝統

北京大学の前身である京師大学堂は、1898 年に創立された当時から日本と深く関わっており、「お雇い外国人」として多くの日本人学者が教鞭をとっていた。1912 年に国立北京大学に校名が変更され、周作人、周樹人などを中心とした日本留学帰りの学者が大いに活躍した。1949 年以降、劉振瀛、周一良などによって、中国における日本文学、歴史の研究を引っ張ってきた。1978 年に始まった改革開放が契機となり、北京大学における日本研究は本格的に再開され、嚴紹瀾教授（中文系、日本における中国古典籍の整理）、王曉秋教授（歴史系、中日文化交流史）の研究成果が日中の学界から注目を浴びた。21 世紀に入り、北京大学における日本研究の分野が一層広まり、研究者の数も大幅に増えることによって、より高質な研究成果が期待されている。

二、北京大学における日本研究・教育機関

北京大学は、5 つの学部、41 の学院・系、271 の研究所を有する。ここで言う「学部」は日本の大学における学部と較べれば、より範囲の広い学問を指しており、大きく分けて理学部、情報工学部、人文学部、社会科学学部、医学部とある。そのうち、日本研究が盛んな学部は人文と社会科学である。人文学部では外国語学院・歴史学系・中文系・対外漢語学院・哲学系、社会科学学部では国際関係学院・経済学院・法学院・政府管理学院・教育学院に集中している。各機関に所属している日本研究者は合わせて 50 名以上に上る。

日本研究・教育機関は主に次の三つである。

（一）北京大学日本研究センター。1988 年に設立された当センターは中国の大学でも設立時期が早いとされている。専属の研究者は配置されていないが、政治・経済・文化・社会・歴史・文学等の分野の学者がメンバーとなり、横断的且つ学際的総合研究を図っている。しかし全学的に見れば、日本研究の関係者が網羅されていないのが現状である。シンポジウムの開催や紀要『日本学』などを通じ、研究成果が公開されており、紀要は 18 号まで出版されている（2014 年現在）。

（二）北京大学現代日本研究センター。1990 年に成立した当センターは中国教育部が国際交流基金と共同運営している「北京日本学研究所」事業の一部である。1 年間の養成講座であるが、設立当初から政府や地方団体、企業、研究機関の若手幹部を対象としていたため、「幹部班」とも呼ばれていた。2000 年～2005 年まで「幹部班」と大学院生を対象とする「院生班」が併存していたが、2005 年以降、北京大学国際関係学院・政府管理学院・経済学院・法学院・光華管理学院に在籍中の博士課程大学院生に絞って募集す

る方針に変更した。（一）の人文系に対して、社会科学系に重点が置かれる意図がはっきりしており、しかも教育者ではなく、若手研究者の養成に力を入れる姿勢が見て取れる。当センターでは若手研究者の交流に積極的に関わり、中国における日本研究の重鎮でもある南開大学・復旦大学と連携して、毎年交替して「三大学博士フォーラム」を開催している。紀要『未名日本論叢』は 2011 年までに第 4 号まで発行されている。

（三）北京大学外国語学院日本語文化学科。日本語教育と人文研究を中心とした日本研究を両立させている機関である。北京大学における日本語教育は 20 世紀の初頭まで遡り、中国で初めて日本語文学修士課程、博士課程が開設されている。日本語、日本文学、日本文化、日中翻訳コースをもっており、専任教員 17 名、全員博士号を取得している。国際学術シンポジウム 50 数回、専門書 25 冊、教材 80 冊、訳著 30 数冊、学術論文 600 篇以上、国内外学術賞 20 個以上といった実績を誇る。学部生、修士課程、博士課程合わせて年間約 60 名を募集。1998 年には北京大学日本文化研究所を成立し、学科の教員に加え、加藤周一など、内外の有名な学者を招聘して、研究を充実させてきた。紀要『日本語文化研究』は第 10 号（2013 年現在）まで発行されている。

三、北京大学における日本研究の新しい特徴

（一）将来を見据えた国際的研究ネットワークの構築。日本国籍の研究者を積極的に採用し、研究者同士の国際的な連携に力を入れている他、大学院生レベルの国際交流も盛んに行われている。歴史学部では毎年京都大学などと定期的にゼミが行なわれており、日本語文化学科では筑波大学との間に教員や大学院生を交えた交流が続けられている。

（二）力強い社会発信。北京大学出版社では、1990 年から 2014 年 8 月現在の間、およそ 400 冊の関連書籍が刊行されている。語学書、専門書、叢書など全般的に発信を続け、NPO や災害救助、アニメ文化など新しい分野の研究成果が目立つ。

（三）よりハイレベルな日本語教育及び日本研究を目指して。日本語副専攻が設けられる他、学部教育改革の一環として、地域研究の基盤がより整備されるようになり、日本研究も期待される。2012 年には大学院専門職課程として、実践的な日本語運用能力を養成するために MTI（翻訳通訳修士）コースが新設された。修了後は、高い日本語能力を活かし、研究の道に進む者もいる。

【記事執筆：孫 建軍（北京大学外国語学院准教授）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
 Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

5th East Asian Culture Research Meeting

Changes in Japanese Studies in China: the Case of Peking University

Speaker: Jianjun Sun (Associate Professor, School of Foreign Languages, Peking University)
 Date: Wednesday, 6 August 2014, 18:30-20:30
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
 Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

From pre-war, Peking University has contributed to developments in Japanese studies in China in the traditional research of Japanese language, culture and history.

At present we have the Peking University Center for Japanese Studies conducting academic research, the Center for Modern Japanese Studies which aims to nurture young researchers in the social sciences, and the Japanese Language and Culture Department centering on Japanese language education and humanities research. Thanks to these three organizations, scholars of different specializations advance forward in more diverse and multi-dimensional research on Japan. Over these 25 years, the Peking University Press has published around 400 volumes of works related to Japan, including the results of research on mass culture, NPO and disaster relief. Furthermore, a new MTI (Masters in Translation and Interpreting) course has been implemented, as a Graduate School career course, in order to produce high quality human resources in Japanese. Some finalists have used their high linguistic ability to turn to research. In this way, Peking University continues to develop as the hub for Japanese studies in China, constantly changing with the flow of the age, but whilst guarding its traditions.

Report by: Jianjun Sun (Associate Professor, School of Foreign Languages, Peking University)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業（平成22年～26年）

戦略研究基礎形成支援項目 研究方法③ “‘対日認識’の現状——以东亚地区为中心”

第5次东亚文化研究会

中国の日本研究の変化—以北京大学为例

報告者：孫 建軍（北京大学外国語学院副教授）
 日 期：2014年8月6日（星期三）18:30-20:30
 会 場：法政大学市谷校区 58年館2層 国際日本学研究所講義室
 主 持：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

戦前、北京大学が日本語、日本文学、日本史这些传统的研究领域为日本研究的发展作出了贡献。现在，北京

大学日本研究中心成为了不同专业的研究者进行学际间研究的场所，现代日本研究中心的目标是培养社会科学领域的青年研究人员，日本语言文化系的主要方向是日语教育及人文研究。3个机关正在展开多角度多次元的日本研究。北京大学出版社在近25年间共出版了400册左右关于日本的书籍，关于NPO、灾害救助、大众文化等研究成果也包含在内。不仅如此，作为研究生院的专业课程，新设立了以培养更高质量的日语人才为目的的MTI（翻译硕士）课程。部分学生从该课程毕业后，选择运用其高水平的日语能力朝着研究的方向发展。北京大学作为中国的日本研究的据点，在守护传统的同时也在迎合时代潮流进行持续不断的发展。

【执笔者：孫 建軍（北京大学外国語学院副教授）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업 (2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토- <일본의식>의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제5회 동아시아문화연구회

중국의 일본연구 변용

-베이징대학교를 예로

보고자: 쑨 쥬권(孫 建軍, 베이징(北京)대학교 외국어학원 준교수)
 일 시: 2014년 8월 6일(수) 18:30~20:30
 장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
 사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구소원, 교수)

태평양전쟁 전부터 베이징대학교는 일본어, 일본문학, 일본역사라는 전통적인 연구 부문에서 중국 내 일본연구 발전에 기여해왔다. 현재, 전문분야가 다른 연구자들이 학제적 연구를 하는 베이징대학교 일본연구센터, 사회과학 분야의 젊은 연구자 양성을 목표로 하는 현대일본연구센터, 일본어 교육 및 인문 연구를 주로 하는 일본언어문화학과, 이 세 기관에 의해 보다 다각적이며 다차원적인 일본연구가 진행되고 있다. 베이징대학교 출판사에서는 최근 25년간 약 400권의 일본 관련서적이 출판되었으며, 그 중에는 NPO와 재난 구호, 대중문화에

관한 연구성과도 포함되어 있다. 또한 대학원 전문직 과정으로서 더욱 수준 높은 일본어 인재를 양성하기 위해 MTI(통번역 석사) 과정이 신설되었다. 이수 후에는 높은 어학 능력을 살려 연구의 길로 들어서는 사람도 있다. 이처럼 중국에 있어 베이징대학교는 일본연구의 거점으로 서 시대의 흐름에 맞춰 전통을 지키면서도 끊임없이 발전하고 있다.

【기사집필: 쑨 쥬권 (베이징대학교 외국어학원 준교수)】



報告者：孫建軍氏（北京大学外国語学院准教授）

第 6 回東アジア文化研究会

中国若者の日本人観に見る「知の拡散」

- 報告者：毛 丹青（神戸国際大学経済学部都市環境・観光学科教授）
- 日 時：2014 年 10 月 22 日（水）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

いま、中国では一冊の雑誌がよく売れています。その名前は、2012 年中国の各都市で約 7 万人の反日デモ発生時、書店に並ぶ瞬間にデモ隊が突入し、すぐにも焼き捨てそうなネーミング……『知日』です。7 万人の反日デモも事実でしょうが、それと同時に 10 万人の『知日』読者もいるということはほかでもなく、もうひとつの事実そのものだと思います。

100%の日本を表現する新規の雑誌を作ろうではないかという話が出たのは、2008 年冬です。北京オリンピック後に各出版社がこぞって、世界のどこかの国の文化を深く知るといような試みのあるコンテンツを出したいと言いました。日本を知る『知日』だけではありません。アメリカを知るのは『知米』、ヨーロッパを知るのは『知欧』といい、韓国を知るなどのシリーズ本のアンテナショップとして、まず日本バージョンを立てたのです。

なぜ日本を真っ先にやらなければならないかという、日本にかかわると売れるからです。それだけのことです。ビジネスモデルとして成り立つことができるのです。中国の大手書店の外国文学のコーナーに行ってみてください。大体 7 割、多い場合は 8 割以上が日本の小説ですらりと並んでいます。それだけではありません。ファッション誌、アニメ、漫画本もすべて含めてそのような情勢の中で、若い編集長は私に向かって自信に満ち溢れていて笑いながら「これでいけますよ」といような話をしてきたわけです。

『知日』の雑誌作りの原則は、中国の読者のために日本の生の、そして直の実体験を提供することにあります。今の日本の文化、芸術、クリエイティブテクノロジーや旅などを表現し記録することに努めながら、2013 年に月刊誌にリニューアルしました。

『知日』は一人ではありません。一つの若いチームですから、私だけは主筆として最年長者ですが、みなさんがそれぞれ自分なりの視野で相手を観察しています。中国文化の背景を参照する者、中国と日本以外の国の文化と比較する者、記事の端々からみなさんの興味の在り方が読み取れます。日本語の「等身大」という言葉の意味は「あなたと同じ視線」だと言います。『知日』という雑誌はあなたと同じ視線であなたを見る、誇張せず蔑視せず賛美せず、文化の記録と叙述として、今後の日本への理解を深めるための道をつくっています。

『知日』には大きな特徴があります。それは政治問題などから一線を画すということです。それに日本雑誌の模倣品ではなく、日本人も気づかないどんな小さなことにも目を向けて積極的に記事とします。編集方針として日本文化の持つ「親しまれやすい」という、いわばグローバル化に向けた知の仕組みを徹底して検証することになっています。中国若者にとって日本文化

に関連する情報への欲求が高くなったからこそ、日本文化を消費する大きな市場を形成しうる状況が生まれ、そして、それを狙っていた雑誌『知日』として、はじめて読者から絶対的支持を得ることができました。

しかし、現在、中国では日本文化に強い関心を持つ若者が増える一方、日本では中国の今の文化に興味を持つ若者が少ないのです。とても残念です。『知日』のように「今の中国の文化を知る」という雑誌を作ろうと思っても、おそらくそのような市場が日本には存在しません。さらには「日本のことを知りたい」という中国の若者と「中国のことに興味がない」という日本の若者の差は、5 年後、10 年後には「日本のことを知る中国人」と「中国のことを知らない日本人」という結果をもたらし、両国の間の力の差、もっと厳密的に言えば、知の格差を生じさせる可能性さえあります。これは戦後の日本における米国の文化への憧れと米国の日本の文化への無関心と同じです。

しかし、今の日本文化だけではなく、中国文化にも実のところこれからの世の中を考える手がかりや、世界という大きなテーマのほかに人間という存在についての鋭い洞察とそれを書き換えていく豊かな想像力が渦巻いています。中国の若者が意欲的であるのに対して、日本の若者が意欲を欠いているということは決して良くはありません。21 世紀の情報環境の変化は「知る」という体験を大きく変えています。そして、人間と文化との関係性も大きく書き換えようとしています。こうした知への欲求による知の拡散はこの変化を背景にしているものです。

『知日』という小さな試みですが、確実に今の日本の文化を伝える有効なツールになりつつ、そしてなによりビジネスモデルとして、さらなる知的な吸収力とともに成長していくものだと思います。

【記事執筆：毛 丹青

（神戸国際大学経済学部都市環境・観光学科教授）】



報告者：毛丹青氏（神戸国際大学経済学部都市環境・観光学科教授）

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
 Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

6th East Asian Culture Research Meeting “Spread of Knowledge” in Chinese Youth’s View of the Japanese

Speaker: Danqing Mao (Professor, Department of Urban Environment and Tourism, Faculty of Economics Kobe International University)
 Date: Wednesday, 22 October 2014, 18:30-20:30
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25F Conference Room B
 Chair: Min Wang (Professor and Full-time Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The magazine *Zhi JP*. (*It Is Japan*)’s inaugural issue appeared in China in 2011 with Danqing Mao as editor in chief. It started from the support of the Chinese youth, and introduces the meaning and significance of young people with an interest in, and concern for, Japanese culture, amidst the relentless “anti-Japanese” sentiment of China today. *It Is Japan* is popular for the following reasons.

1) Its editing policy states it shall “not raise issues”, “not copy Japanese magazines, but write about modest things unnoticed even by the Japanese”, and “closely pursue the idea of ‘receiving from people’ of Japanese cultural standing”. 2) There was no magazine in China specializing in Japanese culture. 3) There was a high demand from Chinese youth for information relating to Japanese culture; etc. An “introduction to Japanese culture” was, then, able to form a marketplace, so even if *It Is Japan* had never been produced, it is highly likely that a similar magazine would have appeared and drawn that readership. At present, there are many young people in China who are greatly interested in Japanese culture, yet there are few youngsters in Japan interested in modern Chinese culture. For this reason, no market exists for creating a magazine like *It Is Japan* that informs on modern Chinese culture. However, the difference between the Chinese youth that “wants to know about Japan”, and the Japanese youth that is “not interested in China” will, in five or ten years’ time, bring about the result of “people in China knowing about Japan”, and “people in Japan not knowing about China”. This suggests the possibility of a disparity in strength and knowledge emerging between the two countries.

Report by: Danqing Mao (Professor, Department of Urban Environment and Tourism, Faculty of Economics Kobe International University)

文部科学省私立大学戦略的基盤形成事業（平成22年～26年）

戦略的基盤形成支援項目 研究方法③ “‘対日認識’の現状——以东亚地区为中心”

第6次东亚文化研究会

从中国年青人的日本观中看到的“知识扩散”

報告者：毛丹青（神戸国際大学経済学部都市環境・観光学科教授）
 日 期：2014年10月22日（星期三）18:30-20:30
 会 場：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室
 主 持：王 敏（法政大学国際日本学研究所専任所員、教授）

2011年由毛丹青主笔的杂志《知日》在中国创刊，并受到了中国年青人的欢迎。报告由此出发，介绍了在“反日”的氛围尚未消去的中国，对日本文化关心和感兴趣的

年青人存在的意义。《知日》获得好评的原因有以下几点。（1）采用的编辑方针为“不讨论政治问题”、“不是日本杂志的复制，而是记录连日本人也未注意到的细小问题”、“彻底地弄清日本文化所具有的‘容易被人们接受’的构造”。（2）此前在中国还没有针对日本文化的专门杂志发行。（3）中国的年青人对于和日本文化相关的信息有着很高的需求。在“介绍日本文化”已经形成市场的情况下，就算没有《知日》的创刊，也很可能会有与之相同的杂志出现，并被读者所接受。另一方面，相对于中国有很多年青人对日本文化十分感兴趣，日本对中国的现代文化感兴趣的年青人则很少，因而就算是想编写像《知日》一样“介绍当代中国文化”的杂志，也不存在这样的市场。此外，“想知道日本”的中国年青人与“对中国没兴趣”的日本年青人之间的差距，在5年、10年之后就会变为“懂日本的中国人”和“不懂中国的日本人”的差距，而这样也就有可能会造成两国间实力以及知识上的差距。

【执笔者：毛丹青（神戸国際大学経済学部都市環境・観光学科教授）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업 (2010년~2014년)
 국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토- <일본의식>의 과거·현재·미래
 연구③ <일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로
 제6회 동아시아문화연구회

중국 젊은이의 일본인관에서 보는 ‘知的 확산’

보고자: 마오 단칭(毛丹青, 고베(神戸)국제대학교 경제학부 교수)
 일 시: 2014년 10월 22일(수) 18:30~20:30
 장 소: 호세이대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실
 사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 전임연구위원, 교수)

이번 보고는 마오 단칭(毛丹青) 씨가 주필을 맡아 2011년 중국에서 창간된 잡지 『지일(知日)』이 중국 젊은이들의 지지를 받고 있다는 점에서 출발해, ‘반일(反日)’ 분위기가 사그라질 줄 모르는 현재 중국에 있어 일본문화에 흥미와 관심이 있는 젊은이가 존재하는 의미와 의의가 소개되었다.

『지일』이 호평을 받은 이유로 (1) ‘문제를 거론하지

않는다’, ‘일본 잡지의 복사판이 아니라 일본인도 깨닫지 못한 사소한 것에도 주목하여 기사화한다’, 일본문화가 가진 ‘사람들에게 받아들여지’는 구조를 철저하게 추구한다’는 편집 방침, (2) 중국에서 일본문화 전문 잡지가 발행되지 않았다, (3) 중국 젊은이들 사이에서 일본문화 관련 정보에 대한 수요가 높았다는 것 등을 들었다. ‘일본문화 소개’가 시장을 형성할 수 있는 상황에 있었기에, 『지일』이 창간되지 않았더라도 『지일』과 같은 잡지가 출판되어 독자층을 형성할 가능성이 높았다는 점이 지적되었다.

또한, 현재 중국에는 일본문화에 높은 관심을 가진 젊은이들이 많이 있지만, 일본에는 중국의 현대 문화에 관심 있는 젊은이가 드물어서 『지일』처럼 ‘현재 중국문화를 알다’라는 잡지를 만들려고 해도 시장이 존재하지 않는다는 점, 나아가 ‘일본을 알고 싶다’는 중국 젊은이와 ‘중국에 흥미가 없다’는 일본 젊은이의 차이는 5년, 10년 후 ‘일본에 대해 아는 중국인’과 ‘중국에 대해 모르는 일본인’이라는 결과를 초래해 양국 간의 힘의 차이, 지(知)의 격차를 야기할 가능성이 시사되었다.

【기사집필: 마오 단칭 (고베국제대학교 경제학부 교수)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討―＜日本意識＞の過去・現在・未来
研究アプローチ④「＜日本意識＞の三角測量―未来へ」

第 1 回勉強会

黒沢清監督作品『トウキョウソナタ』の魅力

―ハイブリダイゼーション（交雑）とモデュレーション（転調）―

- 報告者：クレリア・ゼルニック（パリ国立高等美術学校教授）
- 通訳者：岡村 民夫（法政大学国際文化学部国際文化学科教授）
- 日 時：2014 年 9 月 25 日（木） 18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授）

今回の勉強会は、パリ国立美術学校教授のクレリア・ゼルニック氏を迎え、「黒沢清監督作品『トウキョウソナタ』の魅力―ハイブリダイゼーション（交雑）とモデュレーション（転調）―」と題して行われた。報告と質疑応答はフランス語で行われ、司会は HIJAS 所員で法政大学文学部の安孫子信教授、通訳は法政大学国際文化学部の岡村民夫教授が務めた。

ゼルニック氏は 2009 年にメルロ＝ポンティの美学を主題とする論文を提出してパリ第 4 大学パリ・ソルボンヌから博士号を授与された気鋭の美学者である。近年では美学の諸理論を応用した映画の分析にも取り組んでおり、その成果は *Perception-cinema: Les enjeux stylistiques d'un dispositif* (Vrin, 2010)、*L'oeil et l'objectif: La psychologie de la perception a l'epreuve du style cinematographique* (Vrin, 2012)、*Les sept samourais de akira kurosawa* (Yellow Now, 2013) として上梓されている。

報告の概要は以下の通りである。

黒沢清の映画『トウキョウソナタ』（2008 年）は、黒沢明の『生きる』（1952 年）の焼き直しといえる。すなわち、『生きる』において、主人公である初老の男性はがんに侵され余命いくばくもない自らの境遇を直視し、「正しく生きることのみが人に生きる価値を与える」という考えに至る一方、主人公が勤務先を突然解雇されることで幕を開ける『トウキョウソナタ』は「いかに生きるか」、「いかに生き直すか」が主題となっている。フランスの哲学者フレデリック・ヴォルムスの“revivre”（再び生きる、生き直す）という概念に基づけば、解雇という転落は主人公とその家族が「再生」するための伏線となっており、「生き直す」ということが『トウキョウソナタ』の重要なカギとなっているのである。そこで、ヴォルムスが提示する「再び生きる」ための 5 つの要素（忘却、トラウマ、革命、回帰、優美）を手掛かりに、『トウキョウソナタ』を検討してみよう。

「再び生きる」ことが求められるのは、断絶、「何かが壊れる」ということを経験するためである。この時、人はあたかも何も変わらなかったように行動することで自分に生じた変化を隠すとともに、過去を保持することで衝撃を緩和しようとする。『トウキョウソナタ』においては、主人公の竜平（香川照之）の高校の同級生でやはり失業中の黒須（津田寛治）が失業していることを妻に隠すために 10 分ごとに携帯電話が鳴る

よう設定し、あたかも何もなかったかのように振る舞うことがヴォルムスの「忘却」に相当する。このように、「忘却」は「再び生きる」ことを可能にするかのように見えるものの、ヴォルムスは（1）偽りの人生を生きる、（2）自発的ではなく、訓練し、機械化された振る舞いに頼る、（3）生きる力を奪う行為としての純粋な否定、という 3 つの点で不都合を有していると指摘する。『トウキョウソナタ』の場合では、周到に環境を整えることで何事もなかったかのように振る舞い続けていた黒須が、妻に失業が露頭したことで自殺に追い込まれたことが、ヴォルムスのいう「忘却の 3 つの不都合」に合致する。ここから、われわれは、「再び生きる」ためには、偽りの人生を生きるための機械化された方法とは異なる手段が必要であることが分かる。

第二の要素である「トラウマ」は、「過去の破綻への強迫的な回帰」を意味する。ヴォルムスはトラウマを「暴力的だが外部にあって自分に侵入するもの」とし、「伝染するもの」とする。『トウキョウソナタ』では、竜平の失業によってそれまで平穏であった家族がそれぞれ言い訳をするようになり、互いの関係がぎこちなくなる。これは、竜平が解雇という自分の外からやって来た暴力的な力によって生活の均衡を失ったことが周囲に伝染した結果である。映画の冒頭の開いたままの窓から風と雨が室内へと入り込む描写は、まさにトラウマの次元での「再び生きる」ことが侵入的であることを象徴しているといえる。

このようなトラウマに続いて起こるのが、過去を完全に断ち切る「革命」である。過去と完全に断絶することになる革命を経験することは「ゼロから出発する」ということにつながり、「革命」が成功すれば「再び生きる」ことが可能になるように思われる。しかし、ヴォルムスが革命的に生きることの不可能性や再び生きることの難しさを指摘したことは、「ゼロから出発する」という誘惑が夢であることを意味している。『トウキョウソナタ』においても、大金を見つけた竜平、強盗（役所広司）に誘拐された妻の恵（小泉今日子）などがそれぞれに新しい人生を夢見るもののいずれも実現しないことで、「完全な革命」という夢が失敗に終わることが示されている。

「回帰」という「再び生きる」ための第四の要素は、「完全な革命」といった幻想ではなく、現実的に「再び生きる」こと、すなわち非日常的な革命から日常性へと立ち戻ることを意味する。「回帰」の段階において

「再び生きる」ことは破壊された糸を織り直すことであり、ヴォルムスは「再び生きることは敵対する力と戦った結果、今、ここを生きることを約束することである」、あるいは「偽りの「再び生きる」は崇高な人生を約束するが、真の「再び生きる」とは、生きることそのものを約束する」と述べる。家出から帰ってきた二男の健二（井之脇海）、強盗から逃れた恵、交通事故から戻った竜平が、それぞれの非日常的な体験を語り合うのではなく、食卓を囲んで黙々と朝食をとる場面は、「真の「再び生きる」」ことの具体的な行動として「食べる、飲む、愛する、読む」などの行為を挙げ、「人が再び生きるのは朝である」とするヴォルムスの考えを映像によって表現しており、まさに崇高なものはないが、自分の人生を積極的に肯定する「再び生きる」ことを象徴的に描いているといえるだろう。

最後に残された要素の「優美」は、『トウキョウソナタ』の最後の場面に見出すことができる。すなわち、音楽大学の附属中学校を受験する健二がドビュッシーの「月の光」を演奏する場面において、審査員や観客が健二の奏でる美しい旋律に心を奪われる中で、窓からは柔らかい日の光と風が室内に吹き込んでいる。これは、「再び生きる」ことの難しさを暗示するとともに、そのような「再び生きる」ことが慣れ親しんだものと驚くべきものとの混交、平凡なものと優美さとの混交であることを示唆している。ここには、ある情景から別な情景へとしなやかに移行する黒沢清の感性が働いており、機械的な反復の対極にある可塑性が「再

び生きる」ために重要な要素であることをも示している。

このように見るとき、われわれは、『トウキョウソナタ』が柔軟性と好奇心を内に含む映画であることを理解する。しかし、このような柔軟性と好奇心の同居は、「日本的な映画を作る」といわれた小津安二郎がアメリカ喜劇の手法を参照し、日本の伝統劇能を作品に取り入れた黒沢明がゴッホの絵画に傾倒していたことが示すように、日本映画の特徴であるといえるだろう。また、ヴォルムスの「再び生きる」という概念と議論が映画の分析に有効であることも、『トウキョウソナタ』の事例を通してわれわれが明らかにしたことである。

しばしば「平凡な家族が絆を取り戻す物語」と理解される『トウキョウソナタ』をフレデリック・ヴォルムスの「再び生きる」という概念によって分析することで、物語の構造を明らかにするとともに新しい意味を与えたゼルニック氏の発表は、一面において映画の哲学的解釈であるとともに、日本の平凡な家庭を題材とする映画の持つ一種の普遍的な側面を描き出した。こうした報告は、国際日本学の方法論をより豊かなものとする、意義深い試みであると考えられた。

【記事執筆：鈴木 裕輔

（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】



左より：岡村 民夫（通訳者）、クレリア・ゼルニック（報告者）



会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”

1st Study Meeting

Hybridisation and Modulation in *Tokyo Sonata* by Kiyoshi Kurosawa

Date: Thursday, 25 September 2014, 18:30-20:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
Lecturer: Clélia Zernik (Professor, National School of Fine Arts, Paris)
Interpreter: Tamio Okamura (Professor, Faculty of Intercultural Communication, Department of Intercultural Communication, Hosei University)
Chair: Shin Abiko (Cross Appointee, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

Our lecturer for this study meeting was Clélia Zernik, who is Professor of the National School of Fine

Arts, Paris, and her theme was “Hybridisation and Modulation in *Tokyo Sonata* by Kiyoshi Kurosawa”. The presentation and question and answer session was conducted in French, with HIJAS researcher and Hosei University Faculty of Literature Professor, Shin Abiko, as Chair, and Hosei University Faculty of Intercultural Communication, Department of Intercultural Communication Professor, Tamio Okamura, as interpreter.

In her presentation, Professor Zernik analysed Kiyoshi Kurosawa's film, *Tokyo Sonata* (2008), based on the notion of “revivre (to be reborn, relive)” of the French philosopher, Frédéric Worms. Also, *Tokyo Sonata* is generally understood as a “story of renewing family ties”, yet Professor Zernik revealed a hidden composition, and was able to give the work a new interpretation. Professor Zernik's presentation on this occasion was, on one level, a philosophical take on the film, while on another level, it was an attempt to depict a certain aspect universal to films that are based on ordinary Japanese family life. The presentation was thus considered a deeply significant attempt to enrich the methodology of international Japanese studies.

Report by: Yusuke Suzumura (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

文部科学省私立大学戦略性研究基礎形成事業(平成22年-26年)

戦略研究基礎形成支援項目 研究方法④ “対日意識”の三角測量——面向未来

第1次学習会

黒澤清导演作品《东京奏鸣曲》的魅力——杂交与转调——

日 期: 2014年9月25日(星期四) 18:30-20:30
会 場: 法政大学市谷校区 58年館2层 国際日本学研究所講習室
報告者: 克莱里亚·泽尔尼克(巴黎国立高等美术学院教授)
翻 译: 岡村 民夫(法政大学国際文化学部国際文化学科教授)
主 持: 安孫子 信(法政大学国際日本学研究所所員、文学部教授)

本次学习会的讲师是巴黎国立高等美术学院教授克莱里亚·泽尔尼克, 题为《黒澤清导演作品〈东京奏鸣曲〉的魅力-杂交与转调-》。报告与问答都使用法语, 会议主持是HIJAS所員、法政大学文学部の安孫子信教授, 翻译是法政大学国際文化学部の岡村民夫教授。

泽尔尼克教授从法国哲学家弗莱德里克·沃尔姆斯的“revivre”(再生、重生)的概念出发, 对黒澤清的电影《东京奏鸣曲》(2008年)进行了分析。《东京奏鸣曲》一般被理解为“平凡的家庭重新找回牵绊的故事”, 然而泽尔尼克教授在揭示其背后隐藏的结构的同时, 给予了作品新的解释。此次报告一方是对电影的哲学性解释, 另一方面也尝试着寻找出以普通家庭为题材的电影所具有的一种普遍性特点。该报告是将国际日本学的方法论更加丰富化, 且具有深刻意义的一种尝试。

【执笔者: 鈴村 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客座学术研究員)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반형성 지원사업(2010년~2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구④ <일본의식>의 삼각측량-미래를 향해

제1회 연구회

구로사와 기요시 감독 작품 ‘도쿄 소나타’의 매력 -하이브리디제이션(교잡)과 모듀레이션(전조)-

일 시: 2014년 9월 25일(목) 18:30~20:30
장 소: 호세이대학교 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
보고자: 클레리아 제르닉(Clélia Zernik, 파리 국립고등미술학교 교수)
통 역: 오카무라 다미오(岡村 民夫, 호세이대학교 국제문화학부 국제문화학과 교수)
사 회: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학교 국제일본학연구소 연구소원, 문학부 교수)

이번 연구회에서는, 파리 국립고등미술학교 클레리아 제르닉 교수가 ‘구로사와 기요시(黒沢清) 감독 작품 ‘도쿄 소

나타’의 매력-하이브리디제이션(교잡)과 모듀레이션(전조)이라는 주제로 발표했다. 보고와 질의응답은 프랑스어로 진행되었으며, 사회는 HIJAS 연구소원이자 호세이대학교 문학부 아비코 신 교수가, 통역은 호세이대학교 국제문화학부 오카무라 다미오 교수가 맡았다.

제르닉 교수는 이번 보고에서 구로사와 기요시의 영화 ‘도쿄 소나타’(2008)를 프랑스의 철학자 프레데릭 보름스의 ‘revivre’(다시 살다, 소생하다)라는 개념에 입각해 분석했다. 또한 일반적으로 ‘평범한 가족이 관계를 회복해 나가는 이야기’라고 알려진 ‘도쿄 소나타’의 숨겨진 구조를 밝히는 동시에, 작품에 새로운 해석을 가했다. 이번 제르닉 교수의 보고는 한편으로 영화의 철학적 해석이며, 다른 한편으로 일본의 평범한 가정을 소재로 한 영화가 가진 일종의 보편적인 측면을 그려내는 시도였다. 이러한 보고는 국제일본학 방법론을 더욱 다양하게 하는 의미 있는 시도라고 생각된다.

【기사집필: 스즈무라 유스케

(鈴村 裕輔, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

21 世紀 COE 国際日本学研究叢書 1 (2005.3.31)
外国人の能楽研究

21 世紀 COE 国際日本学研究叢書 2 (2005.12.9)
国際日本学の構築に向けて

21 世紀 COE 国際日本学研究叢書 3 (2006.3.31)
東アジア共生モデルの構築と異文化研究
—文化交流とナショナリズムの交錯—

21 世紀 COE 国際日本学研究叢書 4 (2007.3.31)
いくつもの琉球・沖縄像

21 世紀 COE 国際日本学研究叢書 5 (2007.3.31)
相互理解としての日本研究
—日中比較による新展開—

21 世紀 COE 国際日本学研究叢書 6 (2007.3.31)
日本学とは何か
—ヨーロッパから見た日本研究、
日本から見た日本研究—

21 世紀 COE 国際日本学研究叢書 7 (2007.3.31)
国際日本学
—ことばとことばを越えるもの—

21 世紀 COE 国際日本学研究叢書 8 (2007.5.31)
能の翻訳
—文化の翻訳はいかにして可能か—

国際日本学研究叢書 9 (2009.3.31)
中国人の日本研究
—相互理解のための思索と実践—

国際日本学研究叢書 10 (2010.2.25)
翻訳の不可能性
[2007 年アルザスシンポジウム報告]

国際日本学研究叢書 11 (2010.3.31)
異文化としての日本
—内外の視点—

国際日本学研究叢書 12 (2010.3.31)
日本文化の中の天皇
[2008 年アルザスシンポジウム報告]

国際日本学研究叢書 13 (2010.8.31)
人体と身体性
[2009 年アルザス・シンポジウム報告]

国際日本学研究叢書 14 (2010.10.30)
転換期日中関係論の最前線
—相互発展のための日本研究—

国際日本学研究叢書 15 (2012.3.30)
地域発展のための日本研究
—中国、東アジアにおける人文交流を中心に—

国際日本学研究叢書 16 (2012.3.31)
日本のアイデンティティ
—形成と反響—
[2010 年アルザス・シンポジウム報告]

国際日本学研究叢書 17 (2013.3.31)
日本のアイデンティティを＜象徴＞するもの
[2011 年アルザス・シンポジウム報告]

国際日本学研究叢書 18 (2013.3.29)
相互探究としての国際日本学研究
—日中韓文化関係の諸相—

国際日本学研究叢書 19 (2014.3.28)
日本意識の根底を探る
日本留学と東アジア的「知」の大循環

国際日本学研究叢書 20 (2014.3.31)
国家アイデンティティと宗教
[2012 年アルザス・シンポジウム報告]

国際日本学研究叢書 21 (2015.1.31 予定)
日本のアイデンティティとアジア
[2013 年アルザス・シンポジウム報告]

国際日本学研究叢書 22 (2015.1.31 予定)
受容と抵抗—西洋科学の生命観と日本
[国際シンポジウム報告書]

国際日本学研究叢書 23 (2015.3.31 予定)
百年後の検証・中国人の日本留学およびその日本観
—法政大学清国留学生法政速成科の事例を中心に—



叢書5



叢書16



叢書19

ニュースレター NO.21 翻訳者紹介

- (英語翻訳) バーバラ・クロス (ロンドン大学 SOAS)
(中国語翻訳) 周 曙光 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)
(韓国語翻訳) 金 英美 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)
朴 庾卿 (法政大学国際日本学研究所学術研究員)



国際日本学研究所

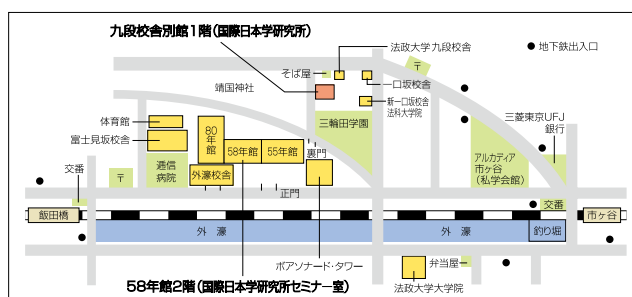
〒102-0073

東京都千代田区九段北 3-2-3 九段校舎別館 1 階

TEL: 03-3264-9682 FAX: 03-3264-9884

E-mail: nihon@hosei.ac.jp

URL: http://hijas.hosei.ac.jp



この冊子は再生紙を使用しています。